
magnet

華梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

magnet

【Nコード】

N4273Q

【作者名】

華梨

【あらすじ】

「…約束だよ。また会いに行くから、次会ったときに返してね」少年がそう言って少女に手渡したのは少年の大事にしていたペンダント。

少女はその約束を胸に抱いて成長するも、約束は果たされることはなく、少年が姿を現すことはなかった。

待つのに飽きた少女は少年を探しに行くことを誓う。
が…

「お前、誰だ……？」

再び会ったとき、少年は少女のことも約束のことも何一つとして覚えていなかった。少年に何が起きたのか？それと同時に少女はある力を発現して…

少女と少年の約束が果たされる日は来るのか？

策略と陰謀渦巻く世界で、少女が守りたいもののために奮闘する、そんな物語。

登場人物紹介（前書き）

ちよつとネタバレ含みます。初めての人は本編を読みかじってから読むのがオススメ

登場人物紹介

アリア（18才・女）

この話の主人公。黒い猫っ毛の髪の毛は腰に届くくらい。瞳は赤い。意志が強く世間知らずで騙されやすい貧乏貴族の少女。

ただ今ソマリア国で侍女をやっている。

約束をした幼なじみを捜すために奮闘。

ユーイ（17才・男）

アリアの幼なじみ。金髪は長く首の所で無造作にくくられている。瞳は緑。

隣のシス国の騎士団の隊長。

過去の記憶がないと言っているが、真偽のほどは本人以外知らない。アリアと別れてからのことを語ろうとしない割と謎に包まれている人。

基本的に無表情だがアリアが関わると少し、表情が出てくる。

4

メイ（20才・女）

アリアの友達でルームメイトの侍女。淡い栗色の髪を一つに括り両サイドは下ろしている。

瞳は青い。アリアに悪戯するのが大好きなお調子者。

ソレイユ（21才・男）

ユーイの指揮する騎士団の副隊長。茶髪の髪はユーイほど長くなく肩に届かない。身長はかなり高い。瞳は茶。穏やかな風貌をした好青年に見えるが性格は腹黒く。人の弱みを握るのが病的に上手い。

王妃様（??才・女）

ソマリア国の王妃様。本名は未だに全部作中に出てこない。「ヴェ

ルスミス・レックス……らしい。

長すぎて面倒と本人が言っていたという情報がある。

王をなくした後も三人の子供を育てつつ公務と政治をこなしたすごい人。

才色兼備を地でいく人でアリア曰く『子供を三人産んだとは思えない』

金髪でうねりのある美しい髪で瞳は青。

剛胆で男より男前な性格。

クロウリー（30才・男）

王妃様の執事的存在。密偵のような仕事もやっているらしい。

細かい性格で、アリアにとっては姑のような存在。

アリアにきつく当たるが、本当はいい人。

髪は執事らしくオールバックの縹色で瞳も同じ。身長は高めだが、ソレイユほどではない。

マルス（17才・男）

ソマリア国の第一王子。いずれは王座を継ぐ身。

短め金髪で瞳は青い。

家族のことを病的に溺愛しており、それ以外には基本的に容赦しない性格。

ただ、ソレイユには軽くあしらわれている。

（本人は認めないがソレイユはマルスにとって兄的存在であるので上手にでられないため）

アリアのことを『マリシアの友人A』と呼ぶ。

ミネル（15才・女）

ソマリア国の第一王女。実は精獣使い。

おっとりした天然の少女で世間知らずはアリアを超える。

マイペースだが、心の清い美しい少女。

金髪の髪を腰よりも下にのばす。瞳は青。

マリシア（１０才・女）

ソマリア国の第二王女。十歳とは思えない聡明さを持つ。

髪は金髪で肩に届くぐらい。王族としては短め。好奇心旺盛でそこから中に足を運ぶため髪が邪魔だったらしい。瞳は青。ちょっと寂しがりでそのため、アリアに良く懐く。

大臣（???才・男）

作中にあまり書かれないちょっと忘れられかけてる隣国の大臣。実はユーイのお父さん。

でも、もうちょっとしたら出ずっぱりの所もあるから待っていてと作者に言われて仕方なく出番待ち中。茶髪で瞳も茶色。

第一話・とりあえず事のあらましから…（前書き）

初めての投稿です。

至らないところが多々あると思いますが、どうぞよしなに。

第一話：とりあえず事のあらましから…

―それ故に、彼等は互いに引きつけ合う。それは、まるで magnet（磁石）のように―

「仮にこの盤の上を世界としたら、私は一体何なのでしょうね？」
豪華な城の華美な一室の中で、女は長い指でチェスの駒を弄びながら言った。

「女王かしら？王様かしら？それともただの兵？」

女の艶やかな唇が紡いだ言葉を聞くと、側でチェス盤を見つめていた男は顔を上げた。

男は微笑みながらチェスの駒を移動させて言った。

その微笑みは臍長けた狼のようであつたし、もしくは優美な猫のようでもあつた。

「今はまだ…何とも」

女は眉を上げて男を見た。男と視線がぶつかり合う。女の駒が倒された音がした。

「チェックメイト」

女はまるでその男の言葉を待っていたかのように笑う。

「そう。勝負はこれから…」

どちらが王者でどちらが駒と成り下がるのか？

*

*

*

少年と少女は草原を駆けた。

その草原は少女の家の私有地で家と近かったせいだろう、少年と少女の格好の遊び場になっていた。

母親が親友同士という都合もあり、少年は少女の家で過ごすことは多かった。少年の母が病気で療養するために、少女の母の元に滞在していたのだ。

それは小さい頃からそうであつたし、それがずっと続くのだと無邪気に少女は思っていた。

「僕、明日から自分の家に帰るんだ……」少年は悲しそうな顔をして少女に言つたその時まで。

少年はおよそ十歳くらいであろうか、背が低く華奢なせいかわ少女にも見える。この地域に珍しくはない真つ直ぐな金髪。色素の薄い緑の目は、今は哀しみの色に染まっていた。

一方、少女は少年より年上のように少年より頭一つ分背丈が大きい。肩まで届く黒髪は猫っ毛で、赤く意志の強い瞳が前髪の間から伺える。

少女は口を閉ざしたまま俯いた。

少年の家は遠く、少女はその正確な場所さえ知らないのだ。もう、会えないと言われたも同然だった。

その沈黙を埋めるように風が少年と少女の髪をそよそよと遊ばせる。

草原がサアツと音を立てて揺れる。この草原は少女の家の近くで、二人の遊び場だった。

それも今日で、最後だ。

少年は今日の今日まで黙ってきた。少女が悲しむのを見たくないから黙っていたのだ。

ここが瀬戸際だった。

「……もう、戻ってこないの？前みたいに」少女は俯いたまま少年に聞いた。

「分からない。お母さんは何も言ってくれなかったから。でも、僕は戻ってくるよ、絶対」

「期待させるようなこと言わないで。無茶しちゃダメよ」

少年はクスリと笑う。いつだって無茶をしてきたのは自分ではなく、目の前の少女であつたから。

「何よ。なんで笑うのよ」少女はふくれ面をした。

その目元が赤い……。これは泣く一歩手前なのだ。と今までの経験から少年はよく知っていた。

「はい、これ」少年は自分の首にかけていたペンダントを少女の首にかけた。

「これって……あなたが大事にしていたペンダントじゃない」

少女は驚いて目を見開いた。少年が今までこのペンダントをどれだけ大事にしてきたか知っているからだ。

「うん。分かってるよ」

「私の家に来たばかりの頃、私がこれを隠したのを、あなたは三晩探し続けて熱を出したのに？」

「今ではいい思い出だね」

「カラスに盗られたとき、私も探すのに付き合わされて、日が暮れても探し続けてお母さんに大目玉を食らったのに？」

「……そんなこともあったね。懐かしい」

「後……」

さらに口を開こうとした少女に、少年は「もう十分だよ」と言った。

「僕は君にこれを預けるよ。あげるんじゃないよ。必ず会いに来るから、その時、返して」

「……約…束？」いいの？と尋ねるように少女は首を傾げる。

「うん、約束だよ」

少女の首元でルビーが詰められたペンダントは光を受けて鈍く光った。

これは、少女と少年が交わしたたわいもない約束。

それは、運命の歯車となつて二人の思いを置き去りに廻りだした。そして、その行く先を知る者は誰もいない。

第二話：朝の給仕という名の戦争

懐かしい、夢を見た。

あなたと約束を交わしたあの日の夢を。私は今も覚えている。
どうか、あなたも忘れないで…

そうでなかったら、私は…

時は経った。

少女は積み重ねた時のなかで、少女から女性へと変貌する時期に差し掛かっていた。

そして、約束は果たされないまま。

少女であったアリアはその思いを留めたままであった。

そして、アリアは今年でもう、一八歳になる。約束の日から五年の月日が流れていた。

「うーん…」

小鳥のさえずりが聞こえる。なんてすがすがしい朝だろう。

豪華な城の中、アリアはベッドの上で伸びをした。そして、さっと首にペンダントをかける。長年の習慣のせいだろうか？これがないと落ち着かないのだ。

寝坊しつつある朝日が顔を出したばかりのようで朝焼けが綺麗だ。

ただ一つ、不満なことがあるとすれば

「…これで朝の給仕がなければいいのに」城勤めの侍女、アリアは布団を抱いて呟いた。

朝の給仕は、戦争だ。

「誰か、皿が後五枚ほど足りないんだけど」と言われれば戸棚から五枚の皿を出し、

「盛りつけが遅い。料理が冷めちまうよ」と言われれば手伝いに行き、

「早く運んでくれないかい。料理が邪魔で通れないんだけど」と言われればさっと皿を一度に四つ持って運ぶ。端から見ればサーカスの出し物に見えるかもしれない。

アリアはてきばきとテーブルに皿を並べる。そろそろ侍女になって三ヶ月経つからだろうか、だいぶこの作業になれてきた。

この大広間で大半の貴族達は立食形式で談笑しながら優雅に朝食を取るのだが。

その一時間前はこんなものなのだ。侍女達が全速力でキッチンと広間を往復する。

優雅な朝食の裏にはこんな苦労があるのだ。

貴族も自分のすることは自分でやればいいのに…。

アリアは貴族がせっせと朝ご飯を準備している場面を思い浮かべて、あまりの滑稽さに思わず笑みを浮かべる。に、似合わない…。

アリアは侍女の仕事が板に付いてきているが侍女の心得はできてないらしい。

むしろ、したくないというのが正しいだろうか？

「アリア、そっちは大体片づいた？手伝って欲しいことがあるんだけど…って何笑ってるの？怖いんだけど」

そう声をかけてきたのは同じ侍女仲間で最も仲の良い少女でルームメイトのメイだった。

メイは侍女の仕事のために、淡い栗色の滑らかな髪を一つに括り両サイドは下ろしている。そして瞳は青く、この国ではさほど珍しくない容姿をしていた。

ここ、ソマリア国では色素の薄い人間が多く、多くの人間は金髪が薄い茶髪なのだ。目は、緑や青、時々茶色と言ったところだろうか。ちなみにアリアは黒い髪を腰まで伸ばしているが、くくると柔らかい髪に跡がついて痛んでしまうので括らない。侍女の仕事中はバングナで我慢していた。

顔は本人曰くつり目なのが嫌らしいが、アリアには分からない。一つに束ねられた髪がメイの動きに合わせて激しく動いた。

「えっと…大したことじゃないから気にしないで。それで、まだまだ忙しくて手が放せそうにないから手伝えない。ごめんね。」

「アリアって本当に面白いわ。観察のしがいがある…ごほんごほん」

「ん？何か言った？」

「いいいえ、お気になさらず！それよりもお腹空くわね。まだ朝ご飯食べてない人にこれは拷問よね」

「それは同感」

だからついつい目の前のご飯によだれが出そうになる。

ああ、いけない。アリアはつまみ食いをしたい衝動を懸命に堪えた。例えば目の前にあるものがアリアの大好物の蜂蜜たっぷりトーストだったとしても。

一個ぐらい…と囁く誘惑を振り払うようにアリアはメイに尋ねた。

「ところで手伝って欲しい事って何？後からだったら手伝えるけど…」

しゃべりながらだが二人の手はいつさい止まらず機械的に動いてい

る。

「ん。そうね、…後で手伝ってもらってから、その時に言っわ。ふふふ…」

含み笑いをするメイにアリアは怪訝な顔をする。

「何か不穏なんだけど…。また何企んでいるのよ」

メイがこういう顔をするときは決まって、アリアに悪戯するときだけのをさすがに三ヶ月の付き合いにもなるアリアは学習済みであつた。

「いや、絶対面白いから大丈夫。アリアの悪いようにはしないわ！」
メイは良い笑顔で言い切つた。その目にはもはや使命感すら感じられる。

どうにも逃げられそうにない。アリアはため息をついた。

大体…

「面白いって何よ…？」アリアは一人呟いた。

*

*

*

メイが最近アリアに悪戯しだしたきっかけは、ペンダントだった。

「そのペンダント、すつごく大事にしてるみたいだけど、恋人からもらったの？」

思わずアリアは顔を赤くして言った。

「っ違うわよ。幼なじみからもらったの。次会ったときに返す約束だから、大事に扱わなきゃなんないの！」

「幼なじみ？男？」

なぜ、アリアは話すことにメイの目が次第に爛々と輝きだしたことに気づけなかったのか未だに後悔している。

気が付けば、約束の話を全てメイにぶちまけていて、その話を聞いたメイは

「ス・テ・キ……。良いわね、純愛ね。ウォッチングに最適の物件だわ……」

よく分からない言葉をぶつぶつと呟いた後、アリアの手を握って「アリアを応援するわ！その相手、私が見つけ出してあげるから！」そう高らかに宣言したのを、アリアは覚えている。

それからというもののメイは何かとおぼしき男を見つけてはアリアの前に連れてくる。

助けはありがたいのだが……むしろいきすぎてありがた迷惑だ。それに頭を抱えるようになるのに時間は掛からなかった。

そもそも侍女というのは実は結構貴族の娘がいたりする。貴族と言ってもはしくれの下級貴族だが。アリアも下級貴族の娘である。下級貴族の家の娘はここで働いて、ここで結婚相手を探すのが普通だからだ。

見初められて玉の輿という手もあるため少女達の夢は大きい。しかし、アリアは城に侍女勤めに来ているのは、お金を稼ぐためでも結婚相手を探すためでもない。

ただ、このままでは一生約束は果たされないような気がして、とにかく自分から動き出したかったのだ。

元々アリアはじつとしてるのが性に合わないのも理由の一つだ。そもそも五年も経っているのに何の連絡も寄こさず姿をいっこうに見せないのが悪いのだ。

しかも、母に話を聞いてみても曖昧に言葉を濁すばかり。

これは何かあるに違いない。まずは必要な情報を集めよう。そう思ったアリアは渋る両親を説得して侍女になった。

アリアは、知るために来たのだ。

会いに来ない理由が悪いものでないことを祈るばかりだ。アリアは心の中で呟いた。

せめて、無事でいなさいよ。…ユーイ。

会うことのない、幼なじみの名を昔の思い出と重ねながら。

第三話：メイの企み、朝の井戸端会議

準備が出来ると貴族達がちらほら入ってくる。

こっちはお腹が空いているのに目の前でお預け状態なのは未だに慣れない。

うう…。私だってお腹空いてるのよ。アリアは心ではそう思いながら笑顔を保つ。

そして、そつと一人の貴族に近づき、その手のグラスに水を注いだ。これも侍女の仕事なのだ。

「昨日からシス国の大臣が来ているらしいのだが…」

アリアはその貴族の言葉を聞きながらゆっくりと水を注ぐ。

「ああ、例の大臣殿か…」

ここ数日は、隣国、シス国から来た大臣の視察の話で持ちきりだった。

確かに、ここ数年隣国との仲が急激に悪くなっているせいでピリピリしていたが。

戦争が起きるのではなどと、大それた事を言う人もいる。

それと、侍女の間でも、隣国については話題に上がっていた。

大臣が云々ではない。大臣が護身のために連れてきた、騎士達にいてだ。

騎士とは、各国にいる軍の中でも優れたものだけがなれるエリート集団で、年頃の女性達にとって憧れの的である。

「本当に騎士様ってかっこいいですね」

「美形揃いだし」

「なんとかしてお近づきになれないかしら？」等々…。

夢みる乙女達は案外行動的で、皆シス国の騎士達にあの手この手で近づいているらしい。

これだけシス国の騎士たちに魅力を感じるのにも理由がある。まずは、この国、ソマリア国はどちらかと言えば商業が中心で武芸に秀でたものがほとんどおらず、騎士団のレベルもさして高くない。その上に、シス国と言えば良質な鉱物が良く採れてその中でも鉄が有名なので、良い武器が集まりその故あってか武芸に秀でた者になり多い。シス国の騎士団といえほどの国の乙女たちにとっても自国の騎士たちとはまた別の特別な存在なのである。

「アリアは誰を狙っているの？」

「え？」

アリアは不意の質問に思わず声が出してしまった。朝も一段落してくると戦場だった調理場も井戸端会議の会場へと早変わりだ。

それにしても、年頃の女性というのは恋愛話が好きなものだ。

「だって、アリアはいつも私達が話しているのに聞いてばかりで話してくれないんだもの。だれそれがかっこいいって騒いだりしないし。心に決めた方が居るんじゃないの？」

「うえ…っと。特にそういう人はいないんです。相手も見つかってないし…」

そして、アリアはそういった恋愛話にさほど興味がない。なのでこういった話は自分に矛先を向けられるので苦手だった。何と切り返せばよいやら…

しどろもどろに言つと周りの侍女の目が一気にこちらを向いた。

何かまずいことでも言ったのかと焦り出すアリアに向かってみんなが口々に言う。

「アリアに限ってそれはないでしょ」

「貴女黒髪で赤目だし、とても目立つもの」

「そうよ。明るいいし、容姿も可愛いし」

よかった、何か悪いことを言ったのではと心配していたので、ほっと一息ついてアリアは安心する。

「ありがとう」笑って言う。

「アリア、可愛い！」そう言われ抱きしめられる。

「く、首が…」閉まっています。

アリアはそう言おうとしたものの日々の仕事で鍛えられている彼女の腕の力は細いのに強かったため、言えなかった。

「あら。つい、私ったら。ごめんね」

侍女達は心優しくいい人達なのだがスキンシップが激しい。

未だにそのノリに慣れないアリアは慌ててしまうのだ。

「そう言えば、アリアは騎士様を見た？」井戸端会議にいつの間にか介入しているメイが尋ねる。

「…う、ないけど」

「けど…？」

アリアは嫌な予感がした。

「もったいないわよ。目の保養になるから見に行ったら？そろそろ騎士様に朝餉を届ける時間だし…。私と一緒に行きましょう。ね？」メイがにんまり笑って言う。

これが、もしかして、手伝って欲しいことというのは。

メイ曰く「アリアの運命の人捜しのためだし…。もしその人じゃなくてもアリアが恋したら友人としてはおもしろいじゃない」だそう

だ。何が「おもしろいじゃない」だ。

保養って何だろうと思いつながらメイと他の侍女達によって半ば無理やりにアリアは朝餉を届けることになってしまった。

*

*

*

重い…。

もしや、コレを運ぶのが嫌で私を連れてきたのでは…。

アリアがそう疑問を持ってしまつぐらい重かった。押すだけで進む滑車なのになかなか進まない。

かなりの量積んであるせいだ。

他の誰かに手伝ってもらおうと思ったが、皆忙しくて断られてしまった。

今日は運の悪いことにパーティーが催されるらしく、皆その準備に追われているのだ。

まあ、昨日隣国から使者が来たのだからこのくらい予想していたことだが。うう、残念。アリアとメイの二人で運ぶ羽目になってしまった。

四苦八苦するうちに目的地に着いた。朝の訓練があるらしく、城の訓練場で食べたいと言う要望があったらしい。

「ほら、アリア。いい男たちがたくさんいるからしっかり見ておくのよー」メイはそう言って入っていった。

後を追ってアリアが入ると、中の騎士と思われる人々、大体十五人くらいだろうか、がこっちを振り向いた。

騎士達が確かに噂通りだった。これでは侍女達が騒ぐのも無理ないというぐらい彼等は格好が良かった。顔ももちろんそうだが体つきも均整がとれていてそこらの貴族よりもずっと“王子様”だ。

それはそうと今は見とれている場合ではない。我に返るとアリアはにこっと笑うと全員に聞こえるように大きめの声で言った。

「ただいま、朝餉をお持ちしました」

騎士の人達も恐らく長いこと鍛錬していたに違いない。皆嬉しそうに寄ってきた。相当お腹が空いているらしい。

こつもニコニコと来られるとこつちとしても大盛りにしてやりたくなる。

とはいっても二人しかいないので配るのに時間がかかる。

「俺たちも手伝いましょうか？」

「え……」

アリアは驚いた。今までそうやって声をかけたものは居ないからだ。

大貴族ともなればこれぐらいやってもらって当たり前。

なので彼等はどんなに忙しそうにしても手を貸すことはないし、むしろ手伝うなんて彼等の矜持に関わるのだ。

…ああ、そうか彼等は騎士なのか、貴族ではないのだ。

「ええ、そうして頂けるとありがたいです。皆さんも早く食べたいでしょうし。」

お手をかけますが、よろしいですか？」

「さすが、騎士様……」メイが少し上ずった声で言う。

それから早かった。皆が手早くとりわけていく。二人でやるよりもずっと早く配り終わると、設置された簡易テーブルで彼等は食べ始めた。

彼等が皆自分でしてしまうせいで、やることもなく、手持ちぶさたのアリアはぼつと立っていた。メイはちゃっかり役得で騎士たちとの会話の輪に入っている。

「こんだけの量、たった二人で重かつたろ？ありがとな」

突然お礼を言われてアリアは今までこんなふうに言われたことがないだけに顔が赤くなった。

「そんな……。当然のことをしたまで、です」

貴族とは違った感じの彼等を前に、地がでてしまった。

「あはは、この量が運べるんだったら、俺らの鍛錬も耐えられるんじゃないか？」

冗談を言って騎士の一人が隊長と呼ばれる人に笑いかけた。

隊長というのは騎士団を構成するいくつかの隊のリーダーだ。

最も腕の立つ人間でなければならぬのだ。そのため、他の隊員は紺を基調とした制服を着るが、隊長だけ白を基調とした服を着るので分かりやすい。

「ねえ、ユーイ隊長？」

「えっ……？」

アリアの心が音を立てて揺れた。それでも運命を刻む時の針は止ま

らない。

第四話：まさかの再会、変貌した幼なじみ

「ユーイ？」思わずアリアは口に出してその名を呼んでしまった。

ユーイという名前は珍しく、そうそう聞く名ではないのだ。

このとき、アリアは混乱していたのだと思う。だってこんな所でその名を聞くとは思っていなかったから。

「ユーイ、隊長って……誰なの？アリアは震えた声で尋ねる。

「なんだ、あんたユーイ隊長の知り合いか？ユーイ隊長も隅に置けないな」

調子に乗った騎士の一人が冷やかすように言った。

一番奥の席に、彼は座っていた。

アリアがゆつくりと目を向ける。

アリアの目に映るのは、訓練用の騎士の衣に身を包み隊長であることを示す白の服に銀の徽章をつけた青年。

金髪は長く、肩より十？下まである。それを首辺りで無造作に括っており、目は昔と変わらない翡翠のような色。飾り気のない洗練された風貌はまぎれもなく、ユーイであった。昔よりも背格好がしつかりして、別人のようだ。

昔は女の子のようだとからかわれていた顔は、年を経て男らしくなり、今は美形と言われる類のものに該当するであろう。

そして、その変貌異常にアリアを一番驚かせたのは、優しげな容貌に釣り合わない近づくものを全て焼き尽くしてしまうような、剣呑な目。

触れたら、身が焼き切れそうだとアリアは思った。

喜びよりも先に恐怖が先行する。

これが、ユーイなの？思わず疑ってしまうほど鋭い目をしていた。

「さあ。お前、誰だ？…」

「嘘！」

思わず叫んだアリアの声が異様に練習場で響く。アリアの様子が急変したため皆がしゃべるのを止めて静まっているから余計に響いた。

騎士達は一体何なのだろうかと言わんばかりに、そして推量するようアリアとユーイを見つめる。

冷たい声のアリアの頭の中に響いて、無機質なその声のアリアは泣きたくなくなってしまった。

信じられない。

目が、耳が…この男はユーイだと告げる。ただ、心でそれを拒絶しているだけで。

なのに。どうして…

「私のこと、覚えてないの？」そして、交わした約束も。

目の前の男は反応しない。それは無言の肯定だった。

「馬鹿みたい…」アリアは小さな声でそう言った。

余りに小さい声だった。

アリアはぶんぶんと頭を振って顔を上げる。泣いちゃダメだと自分に言い聞かせる。

状況は掴めない。わけが分からない。色々な言葉がアリアの頭をよぎっては消えた。

けれどもアリアはもう、子供ではない。だから、みっともない真似はしたくなかった。

そして、侍女として今は事を荒げるべきではないのだ。

アリアなるべく、何事もなかったかのように笑う。これも、侍女の仕事。

アリアの感情一つで、この場所を、雰囲気をぶち壊すようなことがあつては侍女失格だ。

「…そう、ですか。すいませんでした。私の勘違い、です」

そのつもりだった、のに…。

「何故、お前は泣いている？」

そう言われて初めてアリアは自分が泣いていることに気付いた。

「私、泣いてるの？」足下を見ると水滴が落ちて床を濡らしていた。

「…っ」

公衆の面前で涙を流したことに對する羞恥か、目の前にある受け入れたくない現実からの逃避か、アリアは逃げ出した。

どうしよう…侍女失格だ。

訓練場のすぐ側の壁にもたれかかるようにアリアは立っていた。涙が堰を切ったように流れて止まらない。目が腫れてしまうのに。後で、皆に何と言って言い訳したらいいのだろうか。

声を押し殺すことと言い訳を考えている事に夢中で後ろの気配に気

付かなかった。

「…いつまで泣いている気だ。お前」冷たい声…。
アリアが振り返ると一番会いたくなかった人物が側にいた。

「これだから女は苦手だ」ユーイは昔の面影を残したままの冷たい声で言う。

その姿でそんな目を、そんな声をしないで欲しい。涙が止まらなくなるから。

身長は、昔はアリアの方が高かったのに今ではユーイの方が頭一個分より高い。

「ごめんなさい。迷惑かけて」アリアはしゃっくりを上げないように出来るだけ平静の声でユーイに言った。

アリアは悲しいときや不安なとき、ペンダントを握りしめるのが習慣になっていた。

そして、この時も例外ではなかった。

アリアの手元を見てユーイが顔色を変える。

「これは…！…おい、お前、これを、どこで見つけた？」

アリアはただただ驚いて、言葉が出なかった。

やはり、目の前にいるユーイは確かにアリアの探していたユーイだった。

そのことにアリアは絶望してしまう。

アリアのことは覚えてなくてもペンダントのことは覚えているのだ…。

何故？どうして？

アリアは胸の内に起こる言葉を心の奥へ懸命に押し込める。

自然と顔が下がり、目に力を入れる。ユーイの前でこれ以上泣きたくなかった。

今はそれしか考えられなかった。

「吐け。さもないと……」ユーイはアリアの肩を興奮のあまり揺さぶる。

アリアはもう限界だった。泣きそう……！！

「や、やめて……！これは五年前に貴方からもらったの！悪い？」アリアは自分の肩に置かれたユーイの手を振り払って怒鳴る。

「五年前……？」

ユーイが固まったのを好機とばかりに泣き顔を見られないようにアリアは駆け出して逃げた。

「はあ、はあ、はあ……」アリアは息を荒くして立ち止まる。胸が苦しい。

そして、隠れるのにちょうど良い訓練所へと続く廊下の側に生える木の下で声を殺して泣いた。

何故……。ずっと心配だったのに。

アリアはユーイに一目会えるだけでも良いと願っていたはずなのに。ユーイが無事に生きていてくれたらそれだけで良い、約束なんてどうでもいいと思っていたはずなのに。あの時、アリアは喜ぶべきだったのに……。

「どう……して…………？」

何故、涙が止まらないのだろう。

ユーイはもう追いかけてこなかった。

そして、アリアが朝餉を食べた後の食器を持って戻らなければならないのに戻れない事に気付くのはもう少し後になってからだった。

*

*

*

それから、なんとか恥を忍んで食器を取りに行った後、メイが全てを片づけてくれたらしくアリアの努力は空振りに終わった。騎士たちが妙にアリアを気遣うのも痛かった。

その後、調子が悪くなったアリアは忙しい時だというのに皆に休めと言われて無理やり寝かされた。

そのせいで、夜一睡も出来ない……。眠りすぎた。

寒くなってきた時期なので上にガウンを羽織って部屋から出た。心が苦しくてしょうがないのだ。

三日月が窓から顔を覗かせているのが見えた。

そんな月を見ながら歩いてくると少しは心が落ち着いてきた。

全てを微弱ながらに包み込む光はアリアの傷ついた心を癒すことは出来なくても紛らわすことは出来た。しばらく部屋の辺りをうろろしている、後ろから声をかけられる。

アリアは一瞬体が強張ったが、その声がユーイでないことに安心する。

「どうしたの？こんな所で？」そう声をかけてきたのはメイだった。

「メイ…」

「どうしたの？そんなに目を腫らして。今日のお昼にアリアの顔を見てびっくりしたわよ。可愛いアリアをいじめた不届き者はお姉さんが懲らしめといてあげるから安心しなさい」

アリアは首を横に振った。

そして力無い声でメイに囁いた。小さな声で。

「ユーイが、いたの…」メイはその言葉を聞いて頷く。

「そう…」

それは、メイも知っていた。あの場所にメイもいたのだから。

けれども、一言二言会話したと思ったら、アリアがすぐに駆け出してしまったから。そのためメイは何も言えず、アリアの分まで仕事をこなすことしかできなかった。あの時メイはそうすることしか出来なかった。…今、やっと聞ける。メイはアリアの声に耳を澄ませた。

「私のことは覚えてないくせに…ペンダントのことは覚えてたしシヨックで…」

「…うん」

「私は、ユーイが死んでたら、どうしようって、心配してたのに…なあ」

会話がぐだぐだで、何を言っているのか分からない。それでも、メイはそれを聞いただそうとはしなかった。

「知ってる」

それは、ずっと見てきたから。

「本当は、喜ぶべきだったのに…、泣いて、困らせちゃった…。嫌われたら、どう…しよう…」

涙は枯れ果てたと思っていたのにまた出てきた。どうして止まらない

いんだらうとアリアは不思議に思った。

それから、メイはアリアをそっと抱きしめると宥めるように背中を
とんとんと叩いた。

「うう……」その優しさに堰を切ったように涙が出る。
そしてひとしきり、アリアは泣いた。

アリアが泣きやんできた頃、メイは静かに力強く言った。

「アリア。まだ何もかも終わってないじゃない。自分の思いをちや
んと言った？これで引き下がって納得できるの？泣くのはまだ早い
と思うわ」

アリアはそういわれて初めて気付いた。

私、何も言っていない。ユーイが私のことを覚えていないからといっ
てただ泣いただけ。

はっと我に返る。何故？どうして？こうなったのか、アリアは何も
知らないことに気付いた。

「思っているだけでは言葉は伝わらないわ。言葉だけでは伝わらな
いものもあるけど、かといって思っただけではすれ違うこともあるの。
思っただけをちゃんと伝えなさい。」

そして、知ることを、傷つくことを怖れて逃げてはダメ。そうで
なければ、すれ違ったまま。何も変わらないままよ」

アリアはメイの言葉に黙って頷く。メイはそれを見て声を優しくし
て言った。

「……もしそれで泣くことになったら私が慰めてあげるから」

アリアは顔を上げてメイを真っ直ぐ見つめた。そして、涙で濡れた
顔で笑顔を浮かべた。

「うん。分かった。私言ってくるわ」

アリアはメイに言い残すとメイの前から去っていった。

そう言ったアリアの目に一切迷いはなかった。

「何処に行くのよ、全く。本当に猪突猛進なんだから……」
ま、そういうところがかわいらしくて放っておけないかもしれない
が。メイは苦笑した。

第五話：夜のひととき、二人の攻防（前書き）

お気に入り登録してくれた人が……
幸せすぎる。

取りあえず、頑張ります。

第五話：夜のひととき、二人の攻防

突っ走ってここまで来てしまったのだが…。

アリアは自分の短慮を嘆く。どうしてメイは止めてくれなかったのかと責めるのは筋違いだろう。

こんな時間に尋ねたらダメじゃない。非常識な事だ。

問題はそれだけではないのだろうがアリアはそれには気付かなかった。

アリアは元々逢い引きなどといった概念はないのだ。

それ以前にユーイの部屋って何処よ。

ソマリア城は王族がいる本館、ソマリア国の重臣たちのいる東館、来客が泊まる所、西館の三つで構成されているのだが、西館まで来てしまったアリアは引き返そうとする。

アリアの住む場所は侍女練。これは城の奥の方に立てられていて結構西館とは距離があるのだが、アリアはそこまで爆走していたのだ。

「何故お前がそこにいるんだ」

おかしい。アリアは自然と動き出した足を止められないまま。

もう一度、ユーイにあつたら、ちゃんと話そうと思っていたのに。

なぜ、彼から逃げているのだろうか？

「…あつ」アリアの足が止まった。否、止まらざるを得なかったと
いうのが正しい。

「俺から逃げるなんて百年早い」ユーイが息も絶え絶えなアリアの

前に現れたから。

息一つ切れていないのも当然だ。彼は誉れ高い騎士の中でもトップの隊長なのだから。

そういえば、二年ほど前に噂が流れていた。隣国に史上最年少で騎士の称号を受けた者がいると。

アリアが城に仕える前で、情報に疎かった頃でも充分騒がれていた。まさかそれがユーイだなんて考えもなかったが。

その頃から、糸は繋がっていたのだ。アリアの知らない形で。

「何？」アリアは尋ねた。もう逃げないと決めた。だから逃げない。
「もう一度聞く。何故お前がここにいる？」

「えっと。夜の散歩……じゃダメ？」

「お前、本気か？」

「……」アリアは黙った。理由を言うのが躊躇われたのだ。
覚悟は決めたものの、やはり、聞くのは怖い。

「まあいい。それよりも……」ユーイの声が廊下に響く。その声は冷たい。

「あのペンダントは元々俺のものだ。どこで拾ったんだ？」
アリアは反論した。

「違うわ。ユーイが約束の証に貸してくれたんじゃない」

「約束……？」

ユーイが黙った。沈黙が二人の間に漂う。

「私のこと、覚えてないのよね？」アリアは唐突に質問した。

「ん……ああ」ユーイは曖昧な返事をした。

「じゃあ、自己紹介をしなきゃね。だいぶ遅くなったけど……」

「私の名前は、アリア・マイオリー。一応あなたの幼なじみ、だけ

ど…」

ユーイは驚いているような顔をした。アリアは訳が分からず首を傾げた。

視線が交差する。目が合うとユーイは顔を背けた。

「…もうこれ以上聞かないが、とにかく俺のペンダントなのだから、返してくれないか」

「嫌って言うたらどうするの？」

ドン、音がしたと思うと、アリアは壁に手首を押しつけられていた。「嫌とは言わせない…」

左手首を乱暴に捕まれている。痛いのは手首なのだろうか。アリアはそれすら分からずユーイを見つめる。頭がふわふわしてうまく考えられない。

かつての輝く翡翠のような瞳は翳りそこに憎しみなのか哀しみなのか、何とも言えない感情が渦巻いているように見える。

分からない…。ユーイが何を思っているのか、昔は手に取るように分かっていたのに…。

アリアは顔が歪んでしまった。

「…嫌よ。脅迫されて差し出すなんて、御免だわ」

アリアは開いている右手でペンダントを自分の衣服の奥へしまい込む。

これは、アリアとユーイを繋ぐ唯一の形あるものだった。

例え、これが元来ユーイのものであったとしても、今、この状態で渡したくなかったのだ。

やろうと思えばユーイはアリアから無理やりペンダントを取り上げることも出来たが、何故か出来なかった。強いて言うならば、掴

んだ彼女の腕が余りに細く華奢で扱いに困ったせいだろうか。
だから、ユーイは少し、手の力を緩めて言った。

「俺にこれ以上構うな」

「何故？」

「何でもだ」

突き放したようにユーイは言う。

「決めたから。諦めないって」

ユーイはアリアの瞳を見つめた。赤い瞳は意志を持った強い光を放っている。

何処か既視感を感じるもののそれがなんなのか分からないまま、何を思ったのか自分でも分からぬままにユーイはアリアから手を離してその場を去った。

ユーイの姿が消えたと同時に緊張の糸が切れ、アリアはその場にしゃがみ込んだ。

そして、声を殺して泣いた。

彼の目は孤独と哀しみで溢れている気がしたからか。その深さにおののいたのか。何故泣いたのか分からなかった。

でも、分かっていることがあるとすれば、それはユーイがアリアを拒絶しているということだった。

胸が張り裂けそうに痛くて熱いのに、酷く空気が冷たかった。

*

*

*

そう言えば、何故アリアのことを覚えていないのか、聞くことが出来なかったな…

今さらながらにアリアは気付いた。いつも、目の前のことにいつ

ばいっばいで、肝心なことを忘れてしまっ…。少し自己嫌悪に陥りそうだ。

朝日が差し込む。アリアはいつの間にか部屋に戻ったのか気が付くとベッドの上だった。

重い体を起こす。

まるで昨日の出来事は夢だったのではないかというぐらい何も変わらない日常がそこにあった。

安心してアリアが目線をおとすと、違和感を覚えた。首の所がぼっかり空いているような。

アリアはその違和感の正体に気付くと狼狽した。

「っない！ないないない…」ペンダントがないのだ。

いつも欠かさずかけていたのに…。あの時取られていたのだろうか？それともどこかで紐が切れて？やはり、昨晚いた場所とかに落ちているのでは？

探しに行かなければ、ユーイよりも先に取り戻さなければいけない。

そうでなければ、ユーイのことだから、拾われてアリアの手には戻ってこないだろう。

「お早う、アリア」メイが声をかけてくる。

ただその目は悪戯っぽく輝いている。例えるなら、悪戯好きな子供が罾を仕掛けて大人が引っかかるのを今か今かと待っている感じだ。

「お早う…メイ。何か顔にでもついてる？」

アリアは窺うように言った。メイに振りまわされるのはいつものことだが、今は状況が悪い。

「何よ！そんなじゃないわよ。あれ、もしかして…覚えてないの？」

「何が？」

アリアは顔を傾げた。何か昨日されたっけ？ユーイとの再会が劇的すぎてそれ以外余り覚えていないというのが正直なところだ。

「あら、もったいない。昨晚あなた部屋を飛び出したつきり帰ってこないから心配になって部屋の辺りの廊下をうろろろしていたら…」

その次にメイが発した言葉にアリアは目が点になる。そして一拍おいて。

「ええ——！」

朝一番、侍女の部屋の一室で悲鳴が上がった。

第六話：夜が明けて、朝のハプニング

異国の騎士の一団が来たのが珍しいのか訓練場の周りでは人ばかりが絶えない。

しかもいるのは女だらけだ。

自分たちの国にも騎士はいるだろうに……。おかげで気を遣って訓練に打ち込めない。

そんなことを考えながら、その騎士団の内の一人であるソレイユは来客用の部屋から出た。

ソレイユは朝の散歩、ほとんどの人間は朝の徒競走か何かの間違いだろというのだが、それを始めようと思い立ったのだ。ところが、その日課は果たすことが出来なくなってしまった。

朝とは言い難い暗い廊下で、ソレイユは異質なものを見つけたのだ。

廊下の隅で丸くなって眠っていた、一人の黒髪の少女。

始め倒れているではないかと本気で心配したが、規則正しい寝息でその可能性は打ち消された。

ソレイユは黒髪のその少女に見覚えがあった。

昨日ユーイ隊長が泣かせた少女だ。

実際の所アリアが勝手に泣いただけだが、ソレイユは勝手に思いこんでいた。

「ああ、どうしましょう？ここで見て見ぬふりをしては風邪を引いてしまいますし、かといって運ぼうにも何処に運んで良いやら……」
起きる気配のない少女を見ると、涙の後があった。大体のことに察しのついたソレイユが眉を潜める。

「全く。あの人の辞書に気遣いという言葉はないのですかね？」
しかし、これは困ったことになる」とソレイユは思った。

傷心の少女をこの場で起こすのは配慮に欠けると思われるし、出来れば少女の部屋に運んでやるのが妥当と思われる。

「部屋は何処でしょうね？取りあえず心当たりのある場所に運んでみますか？」

ソレイユは騎士団の中でも怖れられる存在だ。

それは腕力によっても剣術によってもない。もっとも騎士団に所属している段階ですでに怖れられるには十分だが。問題は…その知力によってである。

彼に目をつけられた者は一人として無事ではいられなかった。

特に記憶力に関しては彼の右に出る者はいなかった。

つまり、ソレイユは一目見ただけの城内の地図を覚えていたのである。

ひょいと本を拾うような感じで少女を抱えると、

「彼女は侍女ですよ…」記憶が示した場所へとソレイユは向かった。

「とにかく後で隊長には少し説教をする必要があるみたいですね」
ソレイユはくすつと笑った。

*

*

*

「いやー本当にびっくりしたわ。アリアが戻ってこないのを心配して廊下で様子見てたら、後ろから声かけられて…。振り返ったらアリアが騎士様にお姫様だっこされていたんだから」

「何度も言わないでよ。恥ずかしい」

「いや、そういうわけにも行かないわよ。何をどう間違えたらそんなおいしいことになるの？」

「…えーと。廊下で寝てたからかな？」

アリアの言葉にメイは鈴を鳴らしたように笑う。

「廊下…、あははは、普通廊下で寝る？ いや、あり得ない。姫にはなれないよ、アリア」

「…廊下で寝るお姫様がいたっていいじゃない」アリアはムツとして呟く。

「あはは。アリアが拗ねた。それにしても、やっとアリアにも春が…。ああ、おもしろそう。

私全力で応援するからね！」

「いや、違うから」アリアはめいいっぱい否定する。

メイは何でもかんでもそういう方向に持って行きたがるんだから油断も隙もない。

アリアは話題をそらすようにメイに言った。

「えっと。その人にお礼言わなきゃいけないよね。その人誰が分かる？」

「ええ。名前は聞いたんだけど教えてくれなかったけど顔は覚えてるから。今日一緒に会いに行きましょう。ねえ、…アリア」

「な、何？」深刻そうな顔をしたメイに少し驚いてアリアは尋ねた。

「恋したら、す・ぐ・に私に言ってね。悪いようにはしないから！」

「真面目になった私が馬鹿みたい…」

アリアは色々とやるが多すぎて頭が痛くなってきた。

それからいつも以上にアリアは忙しかった。

いつもの仕事を終わると、騎士に朝餉を運びたいという人が多す

ぎて、事情が事情なだけに…

恐らく話したら次の日から侍女全員が廊下で寝ているなんて事になりかねないため、そこは何も言わなかった。メイが取りはからってくれたため上手くごまかすことが出来、何とか朝食を運ぶ役目を貰えた。

そんなやりとりを終えて、朝の練習場に向かう。早めに行くとな数人の騎士達が自主練をしていた。

「この中に、いる？」アリアはそつと、隣にいるメイに尋ねる。

「…んと。遠くてよく分からないや」

「分からない…ってちよつと！何しに来たか分かってるの？」

「もう、怒らないでよ。近づいたら分かるの。ね、入ってもいいでしょ？」

お調子者のメイは軽い調子で入っていく。

邪魔したら怒られると思うんだけど…。

「アリアー」小さな声で、おいでおいでをするメイに引かれてそつと練習場に入る。

「この人だよ。はあ、やっぱりかっこいいー。優良物件ね！」

メイの指差した先にいるのは、身長は騎士団の中でも上の部類に入る背の高くて、細身でも身のこなしからどんなに鍛えられた体か遠目でも分かる。

柔らかなような茶髪に思慮深い蒼の瞳。笑顔を浮かべているせいか穏和な雰囲気で、ただその中で、目は研ぎ澄まされていた。

どう声をかけたらよいのか分からずアリアが立ち尽くしていると、向こうから声をかけてきた。

「君は昨日の人ですね？」

「あ、あの…」

「どうしたのですか？またあの隊長が失礼なことを言いましたか？」

「いいえ、そうではなくて…。お礼を言いにきたんです」

それは事実だが、一応お礼を言いに来たのでそれに関しては言及しない。

「お礼、ですか？」

「はい、私を部屋まで運んで下さってありがとうございます」

「ああ、そのことです。か、気にしないでいいですよ。こちらこそ、あの子が迷惑をかけたようですね。私の方からお詫びします」

「あ、あの子って…」 ユーイのことだろうか？もしそうだとしたら、この人、ただ者ではない。

「ええ。ユーイ隊長のことですよ」

「…猛者ですね」思わずアリアの口から本音が出てくる。

ぼそつと呟いたアリアを見て、目の前の青年が吹き出した。

くすくすと笑いが止まらない。アリアがキョトンとしていると、

「すみません。そんなこと…。初対面の人にそう言われたのは初めてです。」

「はあ」

「私はユーイとはそれなりに長い付き合いなもので。保護者的立場位置なのです」

「そうなんですか」胸がちくりと痛む。五年前のアリアの立ち位置がまさにそれだったからだ。

「ああ、まだ、名乗っていませんでしたね。私の名前はソレイユといます。ソレイユ・レディオス。一応、騎士団の副長を務めています。あなたの名は？」

「アリアです。アリア・マイオリー」

「…そうですか。アリアさんと呼んでも？」

「はい。なんでも結構ですよ」

「あ、ところで聞きたいことがあるんですが。…その、私の寝てた所にペンダント、落ちてませんでしたか？」

「ペンダント？いいえ。落ちていませんでしたよ」ソレイユが答える。

ということは、ペンダントは落とした可能性が…、どちらかということとユーイが持っている可能性が高い。アリアは表情を曇らせる。

「そうですか、ありがとうございます」アリアはそう言って去ろうとしたところ、呼び止められる。

「あの、アリアさん。この後、場所を変えて話をしませんか？聞きたいことがいくつかあります。あなたも気になることがあるでしょうし、悪くはないと思うのですが…」

アリアは突然の提案に目が点になる。願ってもない話だ。どうやって騎士からユーイの話を聞き出そうかと考えていたからだ。

「え、いいんですか？ありがとうございます」アリアがそう言うときソレイユは柔らかい微笑みを浮かべて、いつの間に準備しておいたのだろうか、メモをアリアに渡した。そして、

「それでは、仕事が一段落する…十時ぐらいですかね、そのメモの場所に来て下さい」

というセリフを残して、アリアのもとから去っていった。

*

*

*

「…実は、一目見たときからあなたのことが好きでした」

メイがすっかり役になりきっているのをアリアは半目で眺めやる。

「まあ、うれしい！」仲のいい侍女の一人が悪乗りしている。二人ともなかなかの演技力だ。

ひし、と抱き合う二人に

「…何よその程度の低いコントは？」アリアは不機嫌そうな声で言った。

アリアが不機嫌なのも無理はない。ソレイユとちよつと話をしに行くだけで皆から質問攻めだった。デートなのか？ソレイユのことをどう思うか？など、何度も同じ事を聞く。

…みんなが思っているような展開はないと思うけど。
アリアはほとほとに呆れていた。

「まあ、これだからお子様は」メイは大げさな動作をしながら言った。まだ役になりきっているのだろうか？

まあ、ソレイユさんには全っ然似てないけど。アリアは心の中でつつこみを入れる。

実際につっこみ入れないのは入れても、乙女の逞しい想像力には全く効果がないからだ。

「全く持つてその通りね」うつとりとした様子で皆が口々に言う。

「そうよ、大体アリアは…」メイが語り出した。

ヤバイ、この手の話は長引く…。そう感じたアリアは

「あ、もうそろそろ行かなくちゃ」

そう言って逃げることにした。

「アリアー、ちょっと！これで期待しないなんて女じゃないわよ」

メイの声がアリアの後ろで響く。

メイに若干女を否定されつつもアリアは聞き流してメモの示す場所に向かった。

第七話：知らされた過去、深まる謎

「すみません。遅れました」アリアは駆け足でソレイユのいる場所へと向かう。

「いえ。呼び出したのはこちらですから気にすることはありませんよ」

「……ここつて使っても大丈夫なんですか？」アリアは不安になって聞いた。

ソレイユが指定した場所は西館にいくつか設置された小ホールで、いわば一番小さい会議室といったところか。ちよつとした世間話で使うような場所ではないのだ。

「ええ。ちよつと脅したらすぐに空きましたよ。だからどうぞお構いなく」

アリアは引つかかる言葉が聞こえた気がしたが賢明にも聞こえないふりをした。

「……分かりました」

「まあ、あなたを呼び出したのはちよつとした取り引きのためですよ」ソレイユが微笑みながら言う。微笑む姿はまるで好青年だがやつてゐることは悪代官だ。

「取り引きですか？」アリアは声を堅くする。

性格上、そういうのを好まないのだ。直球勝負が基本なアリアは眉を潜めた。

「大したことはないですよ。ただちよつとした隊長情報の交換ですよ。小さい頃の隊長を知る人はほとんどいませんからね、貴重なんです。そして、貴女は久しく会わなかった幼なじみについての情報を得る。ギブアンドテイクですよ」

それぐらいなら…いいかな？アリアはそう思った。

「それじゃあ…」

ソレイユはアリアの返事に微笑んだ。

「昔のことはよく分らないんですけどね。僕が彼と初めてあったのは彼が騎士になった二年前で、そのころからすでに心を閉ざした野生動物みたいな感じでしたね。」

実際に合うより前に彼のことは存在だけは知っていました。大臣の息子ですから。今ソマリア国に来ているでしょう？あの大臣の息子が隊長です」

「へー。　　って本当ですか！？」

アリアにとって衝撃の事実であった。

あのユーイが大臣の息子…。それと幼なじみと言い張る侍女の女…。それは怪しまれてもしようがないか…。アリアはユーイの態度に少し納得がいった。

それより、そんなに位の高い貴族がなぜアリアの家にいたのだろ。謎がまた増えてしまったようだ。

「全然笑わないので落とし穴に嵌めたり、料理に塩を大量に仕込んだりしたんですけど無反応でつまらなかったんですね。」

貴女と接するときだけです、感情がでてくるのは。本人は自覚していませんけれど。ということで、貴女の言うことを僕は信じていますよ。一応ですが」

アリアは驚いた。ソレイユの悪戯にも少し驚いたがそれより、そんなに感情を無くすようになってしまおうとは思っていなかった。てっ

きりアリアのことを嫌って感情を表さないようにしているのかと
思っていた。そして、

「あ、後ユーイ隊長が貴女のことを覚えていないのは無理ないかも
しれません。あの人、昔の記憶を失っているらしいですから」さら
りと言ったソレイユの一言の威力は凄かった。

「ええ！！！」

確かにアリアのことを欠片も覚えていないのはいくら何でもおかし
いと思った。

それが、記憶喪失…。まだ、望みはあるのだろうか。アリアは思案
した。

「皆の間では当然すぎて、言い忘れていました。すいません」

「何で…ですか？」

「理由は知りません。本人に聞いてもシラを切られるので…。…探
求心が湧きますね！」

「…そうですか」そう思うのか…。

やはり頭のいい人というのはどこかねじが一本抜けているような気
がする。

ソレイユに関してはねじが一本抜けているところの話ではないと思
うがアリアはそこまで考えない。

「それでは、今度はそちらが話す番ですよ」

「はい、分かりました…」アリアはそう言って語り始めた。

ソレイユが聞き上手のせいもあるだろうか、アリアは聞かれるまま
に昔の思い出をすらすらと話した。

「母親同士が仲良しで、隣国に単身嫁いだユーイのお母様が、出産
のために帰省したときには常に家に留まっておられた、と母に聞い
ていました。だからユーイと過ごしたのはだいたい、八年ほど。今
から五年前までずっと一緒でした」

ひと通り、アリアはユーイとの思い出を話すと最後にぼつりと言った。

「とにかくユーイのお母さんは元気かな？あと、妹さんも…。」

ユーイには妹がいた。そうでなければ、ユーイの母はユーイを生んですぐに隣国へと帰ってしまうだろう。アリアがユーイとずっと一緒だったのは、それから数年後に妹、フェリキアの出産のためにユーイの母がユーイを引き連れ家に来たからに他ならない。

それを聞いたソレイユの反応が明らかにおかしかった。

ソレイユは少し神妙な様子で考え込んで、その後アリアに向かって言った。

「アリアさん、ご存じないのですか？」

「え？何がでしょうか？」

アリアは訳が分からずソレイユに尋ねた。ソレイユの顔が暗い。

「ユーイ隊長の母君、ひいては宰相の奥方はすでに亡くなられています…」

「っ……！！」そんな…とアリア驚いて何も言えなかった。

亡くなっている…なんて初耳だ。まさかそんな事態になっていると思っていなかった。

優しげで聡明なユーイの母はアリアの憧れでもあった。なのに、もう会えない…。

アリアは悲しみに目を伏せた。

「そして、ユーイ隊長には妹はいないことになっているのですが…。これは何かありそうですね」ソレイユはさっきまでの微笑みを消し

て真剣な顔で考え込んでいる。

こちらはもつと衝撃だった。アリアとユーイがかわいがっていた体の弱い、ユーイの妹。

「フェリキア…どうして？」

まさか、いないことになっているとは思っていなかった。

*

*

*

アリアがユーイと出会ったのはユーイが生まれたばかりの頃。もちろんアリアも小さくて、その頃の記憶はない。だから、アリアの中ではユーイと出会ったのは五才の頃、フェリキアがユーイの母のお腹にいた頃の話だった。

だから、アリアは自分の妹が生まれるような心地でいたのを覚えている。

髪や目や顔の造作がユーイそっくりな、可愛い妹、フェリキア。その可愛い妹に夢中になったのはユーイだけではなかった。

フェリキアは体が弱かった。そのため、空気が良くて休養にちょうど良いアリアの家に行った。

そのおかげで、アリアはユーイとフェリキアと仲良く遊ぶことが出来たのだ。ずっとアリアの家で。

アリアはユーイと二人で草原に咲く花を取りに行った。フェリキアは花が大好きだったからだ。

よく風邪を引いたりして寝込むフェリキアは、花を見るとパツと微笑むのだ。

それを見るが好きでアリアとユーイはよく花を摘みに行った。

「アリアお姉ちゃん……。ユーイお兄ちゃん……」

ある日、フェリキアはそう言って呼び止めた。手にはアリアたちがたつた今摘んできたばかりの、綺麗なピンクの花。フェリキアはこの花がお気に入りだった。

「どうしたの？フェリキア？」アリアが返事する。

フェリキアは少し気まずそうに躊躇った後、言った。

「私ね。お花……。もういいよ」

アリアは驚いてフェリキアに問う。

「え？どうして？フェリキアはお花が好きじゃないの？」

「うん。大好き。でもね、私、それよりもお花が枯れるの、見るのが悲しいの。だって、お姉ちゃんたちが取ってこなかったら、今も咲いていたのかなあ、と思うと苦しくなるんだもん」

「……そうなの」

アリアは少し悲しい顔で言った。

その時ユーイが身を乗り出して、フェリキアに尋ねた。

「じゃあ、次は根っこ付きのお花を持ってくるよ。それなら、いい？」

ユーイはそう言って、それでフェリキアはすごく嬉しそうに頷いたのを覚えている。

おかげで調子に乗ったアリアとユーイが見つけた植物を片っ端から鉢植えに移したおかげでフェリキアの部屋が部屋というより植物園になって、違う意味でフェリキアに「もういい」と言われたのはいい思い出だ。

別れるときも、ユーイとそっくりな悲しそうな顔をして、

「バイバイ……アリアお姉ちゃん。フェリキアは体が弱いですから、休養を取るなら絶対ここで取りますから、それまでフェリキアを忘れないで下さいね」

そう言って手を振ったフェリキアに泣きながら手を振ったのは、幻ではなかった。

別れた、あの後、一体何が起きたというのだろうか？

ユーイが笑わなくなったのは、そこに原因があるのかもしれないとアリアは思った。

そして、アリアのことを忘れてしまったことも、多分。

第八話：初耳です、そんな話

そのあと、色々な話をした後、ソレイユはアリアに向かって言った。
「色々不可解な点については僕が調べてみます。分かったら教えましょうか？」

「よろしくお願いします。私も出来ることがあったら協力します。情報でも集めましょうか？」

アリアも手伝えることがあるのなら何でもしたい一身でそう言った。

「そうだね、もし貴女が黒髪じゃなく金髪だったら一緒に情報集めも出来たかもしれません」
この国では黒髪は目立ちすぎて不向きですからね、ソレイユは笑ってそう言った。

残念だと思いながらも、道理だと思ってアリアは納得した。
そして、二人は別れた。

ペンダントを探さなくては。

そう思ったアリアは駆け足で、昨日ユーイといった場所の真下と思われる所へ向かった。

これは、ソレイユが「僕は記憶力に自信があるので言っておきますが廊下にペンダントは落ちていませんでしたよ」と告げたためである。

窓からペンダントが落ちる…こともなくはない！アリアはそう願った。

一階の来客の部屋がある練に向かったアリアは誰も見ていないことを確認すると、窓からひよいと出た。

城の外と城壁の間はこの場所では狭く、人二人が並んで歩くぐら

いしかない。

だから、多分ペンダントはもしここに落ちているなら誰にも拾われていないはずだ。アリアは祈りながら、窓から見られないようにしやがんで歩いた。

それから歩くこと数分。

「あつた…」アリアはペンダントを見つけたことが出来た。拾って軽くついている土を払うと、そのペンダントを抱きしめる。

ありがとう神様。ありがとうソレイユさん。

アリアは有りとあらゆるものに礼を述べる。もちろん心の中で。

「良かった…」

なんだかよく分からないけれど、見つかって良かった…。

その時、人の話し声がアリアの耳に届く。何を話しているかは分からないが、すぐ近くにいます。

こんな所で、誰？好奇心にかられて思わずアリアは草むらに隠れながら覗く。

庭師の手がここまではなかなか行き届かないらしく、草むらがこの辺りには生い茂っている。

そのことにアリアは感謝しながらも聞き耳を立てた。

「それで、どうだったの？」女性の声がした。顔を見れば金髪のもので、美しい美女だった。

豊かな胸を強調するようなそれでいて、気品溢れる高価な服に身を包むその美女はかなり高貴な身分の人だろうとアリアは見当をつけた。

美女に尋ねられた男性が口を開く。男性の髪はオールバックの薄い青色で瞳も同じ色。身長は高めで、声の調子は低く冷たい雰囲気だ。顔はよく見えない。どちらかとも年は三〇代ほどだろうか？いや、美女

は二十代かもしれない。

ああ、これはメイの言っていた、デートというやつなのだろうか？恋人同士？？

恐らくメイに言わせれば「これは密会現場ね！既婚者同士の危ない恋…、ああ素敵」という返答が期待できるだろうがアリアには分らなかった。

「そのことですが、王妃様。動きが…」

え？今なんて言った？

アリアは自分の耳を疑った。

そのことですが、王妃様…、そのことですが、王妃様…。

さっきのセリフがアリアの頭の中で何度も再生される。オウヒサマ？追う日様？…王妃様？

「ええ！王妃様！？」アリアは思わず声に出して言う。

「何者だ！出てこい」腰に帯びた剣を抜いた男の怒鳴る声にアリアは身を竦ませた。

…うつ。この自分の短慮さに泣きたい。

アリアは胸元のペンダントを両手で握りながら思った。

*

*

*

アリアは王妃様に関する評判を思い起こした。

確か、王妃には三人の子供がいて、王亡き後も王子が成人するまで支えると言って、実質政権を握っている政治的手腕に長けた人だ

と聞いている。

実物を見て、子供を産んだとは思えない完璧なプロポーションを見て、天はこの人に何物与えたのかと本気で疑った。まさに、才色兼備であつた。

分かつている。これは現実逃避だ。

この状況をどうしようか、取りあえずアリアは現実と向き合うことにした。

そしてその結果、このまま隠れていようかと思つたが、見つかったらもつと怒られると思つたのでおとなしく出ることにした。

「……！」おとなしく出てきた瞬間に男に剣の切っ先を向けられてアリアは恐怖に震えた。

ぎゅっとペンダントを強く握つた。その時のことだつた。

ペンダントが赤く光つたかと思うと男の持っていた剣が音もなく真つ二つに折れたのだ。

「な、何！？」男の焦つた声。王妃様？も驚いて目を見張っている。

もちろんアリアがそんなこと出来るはずもなく、何故こつなつたのかさっぱり分からなかつた。

「キュウ〜」自分の足元を見るまでは。

可愛らしい鳴き声をする生き物がアリアの足下でアリアの足に顔をすりすりしていた。

その生き物は小型犬ぐらいの大きさと、犬に近いが、顔が小さく狐に似ていて、目は大きくつり上がっていて、空のように透き通つた青色の目、耳は兎のように長い。尻尾は長く、すらりとした体型は猫を思わせるがその体を覆う毛は燃えるような炎の色だつた。

「かわいい……」アリアは思わず呟いた。何だろう、この生き物は。

「わぁ、珍しいわ。これって精獣よね？」王妃様が目をきらきらさせて言う。

初耳です。そんな話。

第九話：What is 精獣？

「驚かせて御免なさいね。私はこの国の王妃よ。この男も悪気はないから…」

「すいません。悪気はなかったんです。あなた達の恋路を邪魔するつもりは毛頭ないんで…」

アリアは王妃の言葉を聞く余裕もなく、そこまで言ったところでアリアの謝罪は途切れた。

「ふふふふふざけるな！！ 私は…そんな…」という男の人の怒鳴り声と

「あはははははは、おかしいっ、私がクロウリーと？ あはは…」
王妃の笑い声で。

しばらく、アリアは二人の反応に言葉を失った。

え…、恋人同士じゃないんですか？アリアは男の余りの剣幕にその言葉を飲み込んだ。

王妃が、笑いすぎて涙すら流しながら、アリアに説明する。

「この人は私の…、そうねえ。執事みたいなものの…。ちょっとクロウリー。そんなに怖い顔でにらまなくてもいいじゃない。すっかり怯えてるじゃないの」

王妃がクロウリーという名らしい男に向かって言う。

「これは地顔です。それにこの娘が邪魔をするのが悪いのです」
そう言いながらもなおアリアを睨みつける。すごく怒りを買ってしまっただよう。

「私はかなり楽しめたけど？
見たところ、この城の侍女みたいだし…。まさかこんな所で精獣使いに会えるなんて。あら？」

ここで王妃がアリアに顔を近づける。これだけ近くで美女に見つめられると女でも照れる。

アリアは顔が紅潮せずにはいらなかった。

「珍しいのね。黒髪で赤い目をしているなんて。どっちかと言えば隣国に多いじゃない」

「ふふふ…、ぴったりね」

何がですか？ アリアは尋ねたかったがクロウリーの視線が怖くて口を開けなかった。

「ここじゃ落ち着かないわね。くわしくは私の部屋で…」

妖艶な微笑みと共にそう言われると、頷いていく以外の選択肢はアリアにはなかった。なんか、すごいことになってる。これからどうなるのだろうとアリアは少し不安な反面どきどきもしていた。

「まずは、自己紹介から」王妃様はそう言ってアリアに語りかけた。
「私の名はヴェルスミス・レックス…後は長いので略。貴女の名は？」

「アリア・マイオリーと申します」

「そう、アリアちゃん、あなた、マイオリー家なのね」

「はい、そうです」

アリアはさすが王妃様は下級貴族の名前すら存じ上げているのだと感動していた。

「やっぱり精獣は使い手を選ぶ、か…」

王妃は意味ありげなことを言うと言顔を浮かべた。それは人に警戒心を抱かせないような明るい笑顔だった。アリアの緊張して固まっていた表情が柔らかくなる。

「精獣っていうのわね、簡単に言えば妖精みたいなもののよ。

純度の高いものと、純粋な思いから生まれると言われるわね。今回の場合、そのペンダントのルビーと貴女の心が合わさって生まれたのかな？　ね、クロウリー？」

「はっ、私もそのように思います」

因みに妖精ならアリアも多少知識はある。

この世界を構成する要素は『火、水、地、金、木』からなりそれに派生するものは千種にも及ぶ。その力の欠片…ともいうべき存在が妖精である。妖精は人々の生活を支える上で必要不可欠で、お湯を沸かしたり、光で部屋を照らしてくれるのは全て妖精の力なのである。

妖精を扱うのは簡単ではなく、長年にわたる訓練が必要で、そのために小さな頃から訓練し、国の重要職に収まっていく貴族と、それが出来ない平民とで貧富の差が拡大しているのだ。

それでもやはり、精獣は初耳だ。ユーイもこのペンダントを渡したとき何も言わなかったし…。アリアは首を傾げた。

「なかなか精獣を生み出すだけの純粋な物なんてないのよ。このペンダントは特別なね」

王妃様は言った。

「そうなんですか」

きつと純粋な思いというのはユーイも入っている。あれだけ大事にしていたのだから精獣が生まれたのだとアリアは思っていた。アリアがこれを持っていたのはたったの五年だ。ユーイはこれを出会った頃から肌身離さず付けていたのを思い出す。

「妖精との違いはまず、己の心で忠誠心を持って主に使えること。妖精は生まれたって気ままに生きていくけど、精獣は違う。決して裏切らないし、強い心があるから力も強い。

だから、精獣使いは一人いるだけで戦場をひっくり返すって言わ

れているのよ」

大体軍隊一つ分の力はあるわね。王妃は唇に指をあて値踏みするように言った。

「そんなにすごいのですか？」

アリアはのどを鳴らしてアリアに甘える精獣の頭を撫でながら言った。こんなに愛らしいのに…。アリアは不思議だった。

「だから、精獣に関する情報はかなり制限されてるわ。悪しきもの手に渡らないように。純粹な思いを持つものが手にするべきなのよ。でなければ精獣を生み出すことすら出来ない。

それは私達にとっても損だから」
にっこり笑って言う王妃。

「私、戦争に行かされたりするんですか？」アリアは不安になって聞いた

「本人の意思を尊重するわ。少なくとも私は。

精獣に頼らなくては国を守れないなんて事はないから。基本的に好きにして良いのよ」

王妃の言葉にホッとするアリア。

「っで、まあ、それは置いといて…」王妃はジェスチャーを交えて言うと、少し真剣な顔になった。

「つい先日、隣国の大臣が城に来たことは知ってるわよね？」アリアは頷いた。王妃は話を続ける。

「というわけで、会談して近々私の末娘が隣国に留学する事が決まっちゃったから、そのための侍女を捜していたのよね…」

「それって所謂…」アリアは先の言葉を言うことを躊躇った。

それは留学とは名ばかりの“人質”だ。

というよりもこんな重大なことをアリアのような庶民に言うべきだろうか？アリアは不思議に思った。

「王妃様。それ以上のことは…」クロウリーも警告する。

「だめよ、ここまで言わなくては。どうせ直に分かることだし。私はただの侍女が欲しいわけではないのだから」

王妃様は強い口調でそう言うところクロウリーが黙って仰せのままにと言うように頭を下げる。

先の読めないアリアは首を傾げる。

「…私は、この状況を利用したいのよね。分かるかしら？」

「ええと…」アリアは考えながら口を開く。ふとさつきソレイユと会話したことを思い出す。

『もし貴女が黒髪じゃなく金髪だったら一緒に情報集めも出来たかもしれませんね』

『この国では黒髪は目立ちすぎて不向きですからね』

この国では目立ちすぎて情報集めには向いていないと言われた。では、隣国ではどうだろうか…？

アリアは王妃に向かって口を開いた。

「私に密偵兼用心棒になれということですか？」

王妃の表情は変わらない。もつと言えということだろうか？アリアは迷いながら話を続ける。

「王女様のご留学という状況で、表向き王女の世話という自然な理由で隣国に入ることが出来ます。」

そして、この国では浮くだけのアリアの容姿が、隣国では武器になる。

「隣国で茶色の髪や黒髪が多い中で金髪の侍女が目立たないように

密偵をするのはかなり難しいですから。私のような黒髪の侍女ならそんなことないですし、ついでに、精獣で王女様を守護できます。しかも軍隊一個分？の圧倒的な力で」

金髪の女が色々嗅ぎ回っていると噂になるのがオチだ。その点黒髪なら、むしろ王女付きであることすら隠せば何処でも嗅ぎ回れる。

「…違いますか？」アリアはだんだん自信がなくなってきたので王妃に尋ねる。

「いいえ。その通りよ。期待以上ね…」王妃は悪戯っぽい光を目に宿して言う。

「掘り出し物を、見つけたわね。ふふ、楽しみだわ」

間違えていたら大恥だと思っていたアリアはほっと胸を撫で下ろす。

「…だから、そんなに疑わしい目で見ないであげなさい、クロウリー」

「しかし、私にはなぜあのようなところで隠れていたのか疑問ですから」

クロウリーは相変わらず鋭くアリアを睨めつけている。

王妃はふう、とため息をつくとクロウリーに諭した。

「私が信頼すると言っているのにあなたは私が信じられないの？」

「いえ…」クロウリーが続けようとするのをアリアは割り込んだ。

「…あの、私昨日落とし物を探していて、このペンダントなんですけど…」

クロウリーが怖いアリアは取りあえず疑いを晴らすため、理由を説明しかつたからだ。

「大事なね、そのペンダントが…いえ、どちらかというとそれにくれた人かしら？」

あつさり見抜かれてアリアは慌てる。

「何で分かるんですか？」

「顔に書いてあるわよ」

「本当ですか？」アリアは側の窓に映る自分の顔を凝視する。

何もついていない、普段の自分の顔が映っていた。鏡でないので細かく分らないが。

「そういう事じゃなくてね。ふふ、あなたって本当に面白い子ね。ちよつと間が抜けていると思えば聡い。聡いと思えば存外天然…、これは演技かしら？」

「ええ、どうしてそういうことになるんですか？私、演技なんてしたことはないです」

アリアは慌てて言った。

「ちよつとした冗談よ。ところで、私の話、受けてくれるのかしら？」

アリアは本題をすっかり忘れていたため、少しの間何のことかと思っていた。確かに自分は間が抜けているとアリアは自嘲した。

「…私なんかに出来ますか？」

本当のところならユーイが隣国の騎士であるためにアリアは一つ返事でその話を受けたいと思っていた。数年で帰ることが出来るだろうし。それも、好都合。

しかし、アリアが密偵になれば、背負うのは国の命運の一部。

恐らく隣国との関係は悪化していたのだ。この情報戦で負ければ、軍事力では圧倒的に劣るこの国は戦わずにして負けるのだろう。…出来れば戦って欲しくないのだが。

「私は…戦いたくなんかないです」

この国には、アリアの大事な人が大勢いた。でも、アリアには隣国にも大事な人がいた。

ユーイと…フェリキア。フェリキアに関しては生死すら分からないが、それでも守りたいものに変わりない。

「そうね。私もそうよ」王妃は優しく笑って言う。

「へ？」アリアは思わぬ王妃の言葉に変な声を出す。

「だって、戦争では奪うことはできても与えることは出来ない。幸せも笑顔も喜びも…。王は国民の幸せを考えて行動すべきなのに、こんな事になってしまっただけで申し訳ないと思ってるわ」

「だから…戦争を起こさせないために、力を貸して欲しいの」

アリアは王妃の顔を見つめる。

アリアにはそれだけではない、弱さがあつた。怖いと思う気持ちがあつた。

国が動けば、人の人生も大きく左右される。そんな責任重大な事に自分なんか関わって大丈夫だろうか？アリアが臆するのも無理はない。

「大丈夫よ。あなたなら。なんたって私が見込んだ子ですもの」

アリアの迷いも、恐怖も王妃の言葉で吹き飛んでいく。

もし、アリアが頑張ることとで守れる何かがあるのなら…

この手に転がり込んできた力で何か出来ることがあるというのなら…

「分かりました。…やります」

この手で掴んで見せよう。欲しいものを、得たいものを。アリアは覚悟を決めると、王妃に告げたのだった。

*

*

*

その日からアリアは王女付きの侍女になった。
なんでも、王女はまだ御年十歳で人見知りか激しいから、と言うのが理由だ。

これはただの雑用係から執事になった並の出世で、そういう侍女は一人部屋を主人の近くにもらえるものだが、アリアはそれを辞退して一応部屋はそのままにしてもらった。

「どうして、断っちゃったのよ、憧れの一人部屋。欲しかったくせに」メイが不思議そうに聞く。

「だって、メイと同じ部屋が良かったから…」

もうすぐ隣国へ旅立つてしまうアリアは心細かった。だから出来るだけ、大事な人達と思い出を作っておきたかったのだ。だが、それを言うことは出来ない。

王女の留学はまだ内密なのだから、それを言うことも出来ない。精獣についても、王妃から今の所は誰にも言ってはいけないと厳命されている。

「アリア…。あんたのそういう所とっても可愛い！」メイはアリアに抱きつく。

「うっ。タックルは止めてって言ったじゃない」

「これはタックルじゃないわよ。そうね、強いていうなら、愛情表現よ」

メイは唸るアリアにしれつと言った。

「…とにかく無理はしないでね。何かあったらこのお姉さんがどうにかしてあげるから」メイはそう言ってアリアを送り出した。

アリアの顔色から考えるに壮大なことに巻き込まれているわね、メイはそう思った。

幼なじみとの再会。まさかの障害。そして急な人事異動…。他の不穏な動き。

メイは点と点を繋いで直線にするようになめらかな線でそれらを繋ぐ。

そして、導き出せる答えは…。

「私もこのままじゃいられないわね…」メイはそう呟いた。

第十話：王女付きの侍女に昇格しました

王女の部屋の前でアリアは深呼吸をした。

緊張するがそれも当然だろう。ドアの先にいるのは王女なのだから。アリアの身分から考えて雲の上の人のような存在である。緊張するなという方が無理だ。

心を決めて、そして、ドアをノックする。

「失礼します。マリシア王女様。今日から新しく仕えることになりました、アリア・マイオリーでございます」

取りあえず暗記してきた言葉を言う。そして、おじぎ。王族の顔をむやみと見てはいけないのだ。

少ない時間でアリアが王女付きの侍女になるために覚えた数少ない事項の一つだった。

「顔を上げて」女の子のかわいらしい声が聞こえてアリアは顔を上げる。

マリシア王女は一言で言えば美少女だった。まあ、母があ王妃様という時点で分かっていたが。

見事な金髪は王女にしては短めで肩より下、腰より上、でそれを編み込んでいる。

澄んだ海のような目に傷一つない滑らかな白い肌、華奢な体。まるで人形のようなだ。

「あなたが新しい侍女ですか。大体母様の企みは読みましたわ。密偵…、かしら？よくもまあ、あなたのような人が都合良く転がっていたこと」

訂正。マリシア王女は正真正銘、王妃様の娘だ。

十歳とは思えない聡明さに、会って一分も経たない間にアリアは舌を巻いた。

「あと、アリアと呼んでよろしいかしら？もつと言葉は砕いたものを使って頂戴。

あなたの言葉が聞きたいのよ」

「は、はい…」勢いに押されてアリアはたじたじだった。

「ねえ、どうして、アリアは向こうが姉上でなくて私を選んだと思う？」

ひとしきり世間話をした後、マリシアはアリアに唐突に質問した。

それは、アリアも疑問に思っていたことだった。

マリシア王女の上の第一王女ミネル王女は確か、十五歳。もう婚約できる年だ。

手っ取り早く国を手に入れるなら、自国の王子へと嫁がせるのは普通だ。

だから、そのためにミネルを留学させて、婚約させる手もある。

それをあえて、時間のかかるマリシアを指名する理由…

「…ヒント、私の年齢、よ」マリシアはアリアに言った。

何か、最近人に試されることが増えた気がする。アリアは頭を出来るだけ早く回転させる。

「マリシア様の年齢は十歳ですよ。幼すぎると思います…。いえ、むしろその幼さこそが利点、とか？…」

マリシアは目を瞬いた。

その瞬間、アリアの頭の中で閃くものがあつた。

「ああ、そういえば、そうですね。マリシア様は幼いため、まだ御しやすい。そう隣国は思っているのですね！」

ミネルはすぐに婚約、結婚させることが出来るだろうが、あの手この手で、祖国の不利になるようなことは邪魔をしそうだ。

それに比べれば幼いマリシアを、と思うのはもっともだ。そうだと思つと納得出来る。

「…だと思いますが」アリアは申し訳程度に敬語をつける。

王族付きの侍女ならば、いやそれだけじゃなくて常識のある人間ならそれは敬語じゃなく丁寧語だとつっこむだろうが。アリアは敬語は苦手なのだからしょうがない。

「…思ったよりも使えそうな方ですね。私の侍女たちはヒントを五つは出さないと分かつてくれませんの」良かった。良い評価をもらえてアリアは微笑んだ。

「マリシア様は賢い方ですね。私なんか十歳の頃は木に登つては親にしかれたり、ままごとで母の口紅を塗りたくつたりして怒られていましたから」

今思えばかなりのお転婆娘である。ユーイがその後ろを若干ビビリながらついてきていたが、今は懐かしい昔話だ。

「…姉上や兄上には及びませんの」

これより上が後二人…。化け物だ、この王族は、とアリアは思った。

しかし、そういつて口を尖らせて拗ねた様子のマリシアからは年相応の寂しさを感じる。

恐らく甘えたことなどほとんどないのだろう。

アリアはマリシアに優しい声で言った。

「マリシア様は聡い方だと、皆は思っているのですが、マリシア様はそのことで遠慮する必要はないと思います。どうか、泣きたいときは泣いて、怒りたいときは怒って下さい。せめて私のような者にぐらい我が儘を言っして下さい」

マリシアは驚いて、口を開けたままアリアを凝視する。

どんな顔をしてても可愛い子は可愛いんだなあ、羨ましい。アリアはそんなことを思った。

「マリシア様を初めて見たとき、人形のような可愛らしい方だと思います……」私、人形じゃありませんの」

マリシアは小さな声で、しかしはつきりした声で割り込むように言った。そして俯く。

「……はい。それは、分かっています」アリアがそう言ったもののマリシアは俯いたままだ。

「………」

「私はこのように深く考え、多くの感情を抱く人を人形だなんて思いません」

アリアはきっぱり言って微笑んだ。

マリシアが顔を上げる。

「本当？本当にそう思っているの？」その顔は少し赤くなっていた。

「はい！マリシア様。何処の誰が言ったか知りませんがマリシア様はとっても可愛らしい性格の女の子ですよ」アリアがそう言つと、マリシアは嬉しそうに笑う。

笑うとさらに愛らしい……。アリアはマリシアの笑顔を見て、とても嬉しくなった。

マリシアは少し、間を置いて口を開いた。

「それじゃあ、少し、我が儘を言ってもいいかしら？」

マリシアが小首を傾げて言う。

可愛い。これに逆らえる人間は恐らくこの世にはいないだろう。アリアは頷いた。

「二人の時は私の姉様になって下さいな」

アリアは聞いた瞬間固まった。

* * *

「どう？マリシアとはうまくいつてるの？」アリアは尋ねられて振り返ると王妃がいた。

一日目の侍女勤めを終えたところである。王女の部屋の廊下で、たまたま王妃が通りかかったようだ。

「はい。まあ…。怖れ多いことに私に姉になって欲しいというので対応に困りましたが…」

王妃が驚いた声で言う。

「あの子が？へえー。珍しいものね。あの子は滅多に人にお願いなんでしないのに。もう、母としては寂しいぐらいにね。…やっぱり私の目に狂いはないわ」

「ええ、ありがとうございます！でも、マリシア様は寂しそうでいらっしやいました。差し出度がましいと思いますが、もし時間がありなら会いに行かれて下さい」

アリアは寂しそうにしていたマリシアの姿を思い浮かべながら言った。

多分、アリアのことを姉になって欲しいのいうのも、家族に会えない寂しさからだとアリアは思っていた。

「…そうね。そうすることにするわ。ああ、それと…」王妃がアリアに告げる。

「あなたマリシアが勉強している間は暇でしょ？その時間で密偵になるための訓練と精獣使いのための授業を受けてもらうから」

「…はい、分かりました」

急にハードなスケジュールになりそうである。

ちなみにアリアは自分を慕ってくれるこの精獣にフレイという名を付けた。

必要なときや呼んだときだけ出てきて、後はペンダントの中に居る。という構造になっているかは皆目見当がつかない。

時間に余裕が出てきて、この状況に慣れ、王妃から許可が下りたらメイやマリシア様にもフレイを見せてあげようと心の中でアリアは決めた。

しかし、アリアは知らなかった。これが、まさか地獄の日々の幕開けになるとは…

第十一話：地獄の授業、一日目（前書き）

長いので二話に分けました
連続投稿になります。

第十一話：地獄の授業、一日目

「1、2、3、4…」

アリアは教えられたとおりのステップを踏もうと努力するも、リズムに体がついてこなかった。

おぼつかない足がまたステップを踏み損ねる。相手の足を踏むなどまだ良い方で。

「わっわっ…」足がもつれて相手も巻き込んで転ぶのが今のアリアの実力である。もはや実力と呼ぶのかすら怪しいものだ…。

一度もパーティーでダンスなどという行事には参加したことがないのでから無理はない…。そう思いたい。

因みにアリアの居る部屋は、ソマリア国の大臣やら貴族やら令嬢やらが泊まる、東の館の一室。

現在アリアは授業を受けている真っ最中だ。

「ダメですね、ダメダメですね」相手は転びそうなアリアを受け止め、手厳しいコメントを贈る。そのセリフがアリアの心に刺さる。

「うう…、すいませんっ！」

どうして、リズム感覚が皆無なの、私！！しかも…

「ダンスも真面目に出来ないなど、貴族の端くれだとしてもあり得ませんね。密偵など諦めて、おとなしく家へ帰ったらどうですか？」
そう言つてダンスの練習をする相手はクロウリーであった。

何でよりによつてこの人が先生なのよ！

アリアは以前睨まれたことで完全にクロウリーに対して苦手意識

を抱いていた。

最近はクロウリーの辛口コメントのせいでむしろ苦手になっていた。

「がんばりますから、勘弁して下さい。もう一回、お願いします」
アリアはへこたれずに気合いを入れてダンスという地獄のレッスンに挑もうとするが。

「ダンスに精を出すのも良いですが忘れないで下さいね。これから精獣の勉強の時間です」

とクロウリーに出鼻を挫かれる。

ああ、気合いが抜けていく…。アリアは肩を落した。他の礼儀作法やら歴史の勉強やらはまだ家で母や父に仕込まれているのでどうにかなるが、ダンスだけはぶっちぎりで危うい。

アリアの家は貧乏貴族…ダンスなんて華麗なものは習わなかったのだ。

「ああ、そうですか…」アリアは危機感を抱きながら返事する。

「そうです。先生は私ではありません」クロウリーの言葉に、アリアは落した肩を上げる。

「えっ、本当ですか!？」アリアの声が弾む。その後すぐに「あっ、別にクロウリーさんが嫌なわけではないですから」と付け足す。

ああ、危ない、危ない。これ以上嫌われたら、アリアとしても絶望的な状況になるに違いない。

クロウリーはアリアを見透かすような鋭い目をこちらに向けて、素っ気なく言う。

「別に言わなくてもあなたの思うことなど筒抜けです。心配いりませんよ。精獣について学ぶなら精獣使いに聞くのが一番早いですから…。覚悟は良いですか？」

「は？覚悟…ですか？」アリアは怪訝な表情をする。……………覚悟っ

て何？何の覚悟？

「それでは、お入り下さい、ミネル様」

アリアの返事を聞かずにクロウリーはドアを開けた。

そして、アリアの目の前に経っていた人物は…

「初めまして、アリアさん。私はミネル・レックス・ディ・プリウス。よろしくお願ひしますね」

目の前に立つ女性は、艶のある長く腰より下まで伸びる美しく長い金髪で、澄んだ深海色の瞳…。スラッと伸びた長い手足。王妃に似た風貌…。

王妃の二人目の子供にして、この国の第一王女その人であった。

「えっ…」驚く余り言葉を失ったアリアにクロウリーが補足して言う。

「この国の精獣使いは現在ミネル様以外存在しませんので、自然とこうなりました」

そ、そんなあ…。アリアは途方に暮れた。

*

*

*

「私以外に精獣を持つ方がいなかったの、貴女に会つのを楽しみにしておりました。貴女の精獣を見せてもらって良いですか？」

「あ…はい。フレア、出ておいで…」

フレアがポンと出てきてアリアの頭に着地する。「…痛い」アリアはまさか頭に来ると思ってなかったので衝撃に驚いた。アリアは取りあえず頭からフレアを床におろす。

フレアは悪戯っぽい瞳でキラキラとアリアを見つめる。

「アリアの周りの人間の愛情表現というのは、タックルやら抱き締め攻撃さらには頭に乗っかるといった激しいものがどうやら好みらしい。」

「まあ、可愛らしいわ！触って良いかしら？」目を輝かせてアリアに言うミネルは好奇心旺盛の子供のようである。

「フレアが良いですね。」とアリアが言うとミネルは「そう」と言っ

てフレアに手を近づける。

フレアはミネルの手をクンクンと嗅ぐ。

「キューン」と鳴くとフレアがミネルの手を舐める。「ふふふ。くすぐったいわ」そう言っ

てもう一方の手で優しく撫でるようにフレアに触れる。

絵になる光景だなあ。これを絵に描いたらかなり高額で売れそう、などとアリアは考えてしまった。

「本当に愛らしいですね。羨ましいわ。私の精獣は大きすぎて…。」アリアさん。いつか貴女に見せますから、それまで待っていて下さいね」

「…はい」アリアはミネルの精獣がどんなものか気になりながら返事する。

「アリアさん、聞きたいことがあるのですけれど…」ミネルが改まってアリアに問う。

精獣講座の始まりだ。アリアは姿勢を正してミネルの言葉の続きを待つ。

「貴女は黒パンを食べたことがありますか？」

「は？」

アリアは思わず聞き返してしまった。

いやいや、黒パンというのは、庶民にとってなじみ深い食べ物で、安くて堅いパンのことだ。

ふわふわで柔らかい白パンは庶民にとって、特別な日だけ食べる特別なもののだ。

毎日白パンを食べられるのは、王族や一流貴族といったごく少数だけで。

アリアに言わせれば、ほぼ毎日食べていますけどそれが何か？という話である。

「黒パンなるものを食べたことがないので。白パンと対局の位置にあるパン……。絶対に白パンとはまた違った味のおいしいものに違いありません！」自信満々にミネルは言い切った。

「いえ、違いますけど」甚だしく勘違いしているようですが……。

どう言えばよいものか、クロウリーに助けを求めようとアリアはクロウリーの方を向いた。

クロウリーはさっとアリアから目をそらした。どうやら、アリアを助ける気はないらしい。

自分で何とかしなければ。アリアはミネルに向かって説明し出す。

「えーっと、ミネル様、黒パンというのはですね……」

アリアの精獣講座一日目は、まず黒パンと白パンの違いの説明から始まったのであった。

第十二話：地獄の授業の弊害、人々の反応

朝。起きてマリシアとお話。「お姉様」と可愛らしい声で言われて
幸せな気分になる。

昼。クロウリーに毒舌を吐かれながらお勉強。最近何を言われても
笑って流せるようになる。これは進化かそれとも退化なのか…。

晩。ミネルとほぼ雑談で終わる精獣講座を受ける。ミネルはアリア
の日常生活に興味があるらしく、質問攻めに遭う。これで良いのだ
ろうか？

これが、今のところのアリアの一日のサイクルである。

アリアはミネルの精獣講座を終えた後、クロウリーから山ほど与え
られた課題に取りかかっている。

そのため、寝ようかと思った頃には夜が明けかかっていることもし
ばしばである。

ユーイとの接点はおかげでゼロに等しい。元々、王女付きの侍女
になった時点でそれは確定していたが、この地獄の授業のせいで、
もはや見かけることすらない。考える暇も…ない。

「アリア、大丈夫？最近よく寝てないみたいだけど……」メイが心
配してアリアに声をかけた。

「ふふふ、大丈夫、よ。このくらいまだまだ……」アリアが心なし
かやつれたように見えるのはメイだけではない。本人以外全員がそ
う思っている。しかし肝心の本人だけ、その自覚がない。

「アリア、あなた何をしようとしているの？」

「何って、歯磨きだけど？」

アリアは櫛を持って齒磨き粉を付けようとしているところであった。
「アリア、あんた、目やばいんじゃない？」メイはアリアを医務室に連れて行くべきだと思った。しかしアリアの猛反対によって実現させることは叶わなかった。

「お姉様。本当に大丈夫ですか？」

マリシアは日に日にやつれていくアリアに不安げな目をして言った。

「大丈夫です、マシリア様。朝餉を取りに行つて参ります」

「いえ、もう他の侍女に行かせたからいいですよ。お姉様はお願いですからここで座つていて下さいませ」

「…分かりました」

「出来ればここで横になつて欲しいですけど」

「それは無理ですね」アリアは笑つて断言する。

「……………」

マリシアは黙りこくつてため息をついた。

「昨日出した課題は仕上げてきましたか？」クロウリーはアリアに問うとアリアは笑つて、

「はい！この通り。歴史のソマリア国の前身となつたフランス国が何故滅びたのか、その原因と考察。後、薬草辞典のナ行と八行の薬草についてレポートです」

アリアは太い紙の束をクロウリーに渡した。

「……………よくもまあ続きますね」クロウリーはその紙の重さに呟いた。並大抵の努力ではこの重さにはならないだろう。

「私はやるつて決めたことはやり通す主義なんです！」アリアはややつれた顔で言った。

「…それは結構なことですね」

クロウリーは相変わらずの鋭い目でアリアに向き直る。

「それでは今日の授業を始めましょうか？」

「……ところで、アリアの目の下にある黒いのは何かしら？」

ミネルがアリアの顔を見ながらアリアに告げる。

「え？それって隈じゃないですか。ミネル様、隈というのはですね。夜も寝ないで頑張った者にだけ与えられる勲章なんですよ」

「まあ、そうなの？私も隈を作ろうかしら？」

「ミネル様！それだけはお止め下さい！！私が王妃様に殺されます！」

クロウリーが血相を変えて止めに入った。

精獣の授業はスローペースで進んでいく。

アリアにとっては、他の作法やら、歴史やらそしてダンスの授業はクロウリーによって恐るべき早さで進むだけに余計にゆっくり感じられる。

精獣使いとは文字通り、精獣を使役するものである。

精獣使いの力量は、いかに精獣を制御し心を通わせられるかにあるという。

そのために、精獣つかいは精獣の宿る物、アリアの場合ペンダントだが、それを常に身につけ精獣と常に【対話】をする必要があるのだという。

また精獣にもそれぞれ個性があって、力の強さも違うし、特性も違う。

「例えば私のグランちゃんの司る力は、水。守りに特化しているの」

ミネルは言う。

「どうやらグランというのがミネルの持つ精獣の名前らしい。」

「じゃあ、私のフレアは……」

「それは自分で見つけなきゃダメよ」

「どうやってですか？」

「聞いたら教えてくれるわよ」

「しゃべるんですか!？」

「そういうものじゃないの？」

二人は寝そべってあくびをしている最中のフレアを見る。

疲れたのか、目を閉じて、たまに耳がピクツと動いている。

「……。まあ、頑張ってるね。心はきつと通じるわ」ミネルは励ましの言葉をアリアに送る。

「……………」

また、術を使うときは詠唱が必要である。それは、妖精たちに働きかける呪文と同様である。ただ、詠唱は呪文と違って精獣によって違う。それも対話の中で精獣から聞かなければならないらしい。

アリアはここまで話をミネルから聞き出すのに五日もかった。

…先はまだまだ長そうである。

ミネルが嬉しそうに雑談するためアリアは止めることが出来ないのだった。側に控えるクロウリーは端から止めるつもりなどないらしい。

これって、授業ですよ？アリアは疑問に思うも余りに嬉しそうな様子のミネルを見て何とも言えなくなる。

「クレア…あなたの属性はなあに？」アリアは話しかけてみるものの、クレアは何?と言った感じで首を傾げるだけである。

「もう。どうすればいいの？」アリアは途方に暮れた。

そして、迎えた六日目の授業の時のこと。クロウリーは用事があった席を外していた。

「何か精獣使いって色々大変そうですね…。出来る気がしないです」

アリアは不安になって言う。対話が成立するかすら怪しい状況で不安にならないはずがない。

ミネルはそんなアリアの様子を見て、少し考え込む。

「…そうね。ちょっと怒られるかもしれないけど…。ついてきてアリアさん！面白いものを見せてあげるわ」ミネルがそういつて部屋を抜け出す。

「ちょっと。待って下さい！」

アリアはミネルを止めることが出来ないままミネルの後を追う。

…もう、クロウリーに無断に部屋を抜け出したとして怒られることは決定した。アリアは移動の途中でミネルを止めることを諦め大人しくついていくことにした。

「ここです。入って下さい」

ミネルが入っていった先はミネルの部屋のような。女の子らしい、されど落ち着いた高級感溢れる部屋だった。ミネルは青色が好きなのか、部屋の家具や壁紙などは青色系統だった。

アリアは見慣れない目新しい部屋を見渡していると、

「ふふふ。見て驚かないでね」ミネルはそっと部屋にある本棚の一つに手を置いた。

「……………」何事かを呟いたかと思うと、恐らく呪文だろうが、本を五十冊は入っていると思われる棚が、いとも簡単に動いた。まるでドアのようだ。

「さあ、ついてきて下さいな。私の修行場へ連れて行って差し上げます」

本棚の後ろには下へと続く階段が見えていた。

第十二話：地獄の授業の弊害、人々の反応（後書き）

アリア、奮闘中。

ミネルはものすごいマイペースです。

ユーイはあと二、三話後ぐらいに出てくると思います。

第十三話：いざ、対面！ミネルの精獣グラン

「…暗くて前が見えないんですが」アリアがビビりながらミネルに言う。

「それもそうね。でも慣れるとどうって事無いわ。だから大丈夫」何でもないようにミネルはのんびり言った。

アリアは手を頼りに壁伝えにゆっくり階段を下りていくのに対して、ミネルはささつと進んでしまう。
置いていかれるのではないかとアリアが少し不安になるほどだ。

そして、ミネルの後を追ってアリアが息をやや上げながら辿り着いた先は、よく分からなかった。暗いせいでどのくらい広いとか何があるのとかが見えないのだ。

そして、真っ暗で怖いのでアリアは壁から手を離すことが出来ない。

そんなアリアをよそに、ミネルは嬉しそうな声でアリアに言った。

「ここはね。川から引いてきた水を城で使うために一端ためる場所なの。だから、水も使われていなくて綺麗だし。水属性のグランちゃんも喜ぶの」

ミネルの声が響く。

どうやら、広い空間にいるらしい。ミネルの話からもその大きさが伺える。

ミネルがパチンと指を鳴らすと薄暗い地下が灯りによって照らされる。光の妖精の力を借りているのだらう。

普通の人間はこんなに簡単に妖精の力を使うことは出来ない。…さ

すがは王女様だなあ。
アリアは感心した。

「わあっ…湖みたい」アリアは思わぬ風景に声が上がずる。

照らされた水を貯めるタンクが湖のようだった。

まるで地下に作られた人工の湖のようだ。周囲は石造りで湖を中心にドーム状になっている。

「アリアさんにやっとグランちゃんを見せられるわ…！」ミネルは
そう言いながら、自身の耳飾りに手を当てる。青色の宝石がリン、
と鳴る。

「…グラン。出ておいで」

そして、姿を現したグランにアリアは腰を抜かしそうになった。

アリアの目の前にいるのは、銀色の鱗に身を包み、神秘的な青い瞳、
そして、頭に輝くばかりの角を一本もつ、…竜。

絵本であつたことしかない。架空の生物だ、と思っていたアリアは
その迫力に声を失う。

「……………！！？」

アリアはミネルを凝視する。…これって、本物ですか？

「可愛いでしょ。うちのグランちゃん」ミネルは嬉しそうに微笑ん

だ。

可愛いのだろうか？竜が？どちらかと言えば神秘的、美しいという表現が似合いそうだが。

「はい、そうですね」それらの言葉を奥の方へ押し込めてアリアは同意した。

ミネル様がそう言うのなら、それで良い…か、とアリアは思ったのだ。

アリアはだんだんスルースキルが上がってきているようだ。本人に自覚があるかは不明だが。

自分のことには割と無頓着なアリアは目の前の精獣を見つめた。

【主よ。この見慣れぬ娘は誰だ？】

どこからともなく声がするの。アリアは不思議に思う。心に直接響くような不思議な声。

もしかして、この声の主って…。

「アリアさんよ。私と同じ精獣使いなの！」ミネルが竜に向かって語りかける。

やっぱり！アリアは心の中で思う。……………すごいこれが、【対話】。

アリアは初めての体験に体が震えそうだった。

目の前にいる精獣は確かに実在して、意志を通じ合える。それが、あまりにも夢物語のようで、夢と現実の区別がつかなくなりそうだ。

「アリアさんにも分かる？」この声のことを指すだろう、アリアはそう思って頷いた。

「はい。すごいですね。他の人にも聞こえるんですね」

「いえ、他の人は聞くことは出来なかったわ。」

もしかしたら、精獣使いなら聞き取れるのかもしれないわね」

アリアは自分には聞こえるのに他人には聞こえないことを知って驚いた。

こんなにはっきり聞こえるのに…。

「きっとグランちゃんに聞けばもっと詳しいことが分かるかもしれない。アリアさんが【対話】できない事とか。フレアちゃんを出してみて」

アリアは頷いて、フレアの名を呼ぶ。アリアの目の前にフレアが現れた。

【このような場所で同胞に会うとは思わなかった。…娘】

竜、グランに呼びかけられ、アリアは湖に佇む竜を見上げる。

【我らが対話の成し得たのは、互いがその心の在処を知っているからだ】

「心の在処？」アリアはその言葉の意味が分からず聞き返す。

【純なる物と純なる心が融合するとき、我ら精獣は生まれる。その純なる心は何処から来たのか？それを知ることが対話の足がかりになるだろう】

「ありがとうございます！…グラン、さん？」一瞬“様”をつけようとしたが、そこまで改まったら逆に悪い気がして“さん”に変えた。

それから、ミネルはグランのアドバイスに「さすが私のグランちゃん！」と褒めるとグランは【主に褒められて悪い気はしない】と言った。

「では、最後に私とグランちゃんのお見せしましょう」
ミネルはそう言うと、目を閉じた。グランも続いて目を閉じる。

【主、ミネルの名において命ずる。其の身を盾と成せ。銀の鱗は水を掻き抱いて灼熱の炎を飲み込み、血を洗い流す。其の身に秘めたる力を解放し委ねよ…】
厳かな詠唱が唱えられる。

アリアは余りの厳かな雰囲気思わず息をのむ。

ミネルが詠唱を言い終えたたん、アリアは水色の球体に包まれた。

「わ…」アリアはそつと球体に触れてみると水で出来ているらしく、手が少し濡れた。

「うふふ…。結構凄いでしょう？このバリアーはやろうと思えば城全体を包むことも出来るのよ」

「…すごい」アリアは驚いた。城全体を包む？あれだけの範囲も出来るなんて…

【主。余り無茶はすべきではない。城を包むなど、我は好まない】
「大丈夫！」ミネルはグランに向かってそう言うとアリアの方へ向いた。

「力は限られているの。主の精神力によって左右されるのよ。
だから、力を使いすぎると、あまりの衝撃に廃人になってしまう可

能性だつてあるの。

それに精獣は万能ではないの…。傷も負うし、死ぬことだつてあるから、大切にしてくれ」

アリアはミネルの言葉を心に刻みながら頷いた。

そして、考える。自分の心の源が果たして何なのかを…。

【娘…。この者はお前と話をしたがっている。後はお主次第だ…】
グランは最後にアリアに向かってそう言ってミネルの耳飾りの中に吸い込まれていった。

その後。

当然クロウリーがこの状況に気付かぬはずもなく、アリアはミネルと共に、恐らくアリアは悪くないのだろうがついでに、こんこんと説教を受ける羽目になった。

自分はもしかしたら、運が悪いのかもしれない…。アリアは叱られながら思った。

第十四話：Let's party！バレたら即クビ

そんな感じで一週間が矢のごとく去っていき、疲労困憊のアリアは王妃の一言によってとどめが刺された。

「あ、今日隣国やその他諸々の国の使節団とのパーティーがあるの。一週間も訓練したんだから、参加しても大丈夫よね。貴族嬢の振りをして侵入して情報集めする練習でもしてきなさい」

「……！？」

驚きのあまり口をパクパクさせて何も言えないアリアにポンと封筒を渡して

「はい、これ招待状。頑張つてね！」ととりつく島なく言い切った王妃様は忙しそうに去っていったのだ。

「クロウリーさん……」どうしようとはばかりに助けを求めるアリアに

「せいぜい頑張つて下さいね。もし失敗して正体がバレたりしたら、密偵の話はなかったことに」と言つて王妃様の後に続いて去つていった。

つまり、バレたら、クビ。

「……どうしよう」うまくやれる自信がないとは言えず、頭を抱えたアリアにはその後の王妃とクロウリーの会話を聞き取れるはずがなかった。

カツカツと廊下に二人の足音が響く。二人の向かう先は王の間。そこで政を行わなければならないからだ。

「王妃、王妃様！本気ですか？」

クロウリーがやや険しい目線を送りながら王妃様に問う。

「貴方にしては珍しいわね。あの子に肩入れするだなんて」王妃は艶やかに微笑む。クロウリーはそれでも鋭い目線を送り続ける。

クロウリーは人間観察が得意な方だ。その中でもアリアという少女は特にやりやすかった。

感情がそのまま顔に表れる。あれほど感情と表情がイコールな人間も珍しい。

これは、密偵に決定的に向いていない。クロウリーはそう思った。

それでもクロウリーが渋々レッスンを受け持ったのは、アリアの強い意志に押されたからだ。諦めると告げるクロウリーにアリアは「絶対諦めません。続きをして下さい」と言ってあの殺人スケジュールを一週間も過ぎたのだ。たいした頭とど根性だ…。

そう思ったクロウリーはわずかながらにアリアに対する態度を改めていた。

「クロウリー。貴方は優しすぎるわ…」王妃はそつと言った。

「危険な目に遭わしたくないなんて正直に言える貴方じゃないから、あんな迂曲屈折した方法で、ねえ」

王妃は何故クロウリーがあそこまで厳しいスケジュールを組んだかを知っている。

全ては、アリアを諦めさせるため。これ以上、関わらなくてよい闇に関わってしまったくないように。

…全く。巻き込まれる前に安全な家へ帰れ、くらい言えないのかしら？

王妃は意地悪く微笑む。

クロウリーは王妃の言葉に首を振る。「足手まといは居ない方がましなんです」

「また嘘について。彼女は腐っても精獣使い。どの国にとっても喉から手が出るほどに欲しい存在よ」

図星を指されてクロウリーは黙り込む。クロウリーはこういう時に黙り込む癖があるのを長い付き合いの王妃はよく知っていた。クロウリーをいじめるのはこのくらいにしておこうか。

王妃は時々思う。なぜ自分が密偵には決定的には向いていないあの子を選んだのか。

何故危険と分かっている場所を守るべき一般人を巻き込んでしまうのか。

その時、王妃の脳裏に小さな末娘の姿が浮かぶ。

可哀想な子、愛しい子…。聡明すぎて、優しすぎて王族に生まれてくるべきではなかった子。母である前に王妃である私では何もしてあげられない。

これから単身異国へ半ば人質として赴かなければならないあの子に代わってあげられない、守ってあげられない。

だから、せめて孤独の中で心を枯らしてしまうことないように…。

「あの子には申し訳ないけど、マリシアには必要だと思ったの。あの子が」

真つ直ぐに心を見つめてくれるアリアのような存在が。
精獣使いは心の清い者にしかねない、そんな精獣使いのアリアならきつと、あの子を…。

まだ見ぬ未来で最愛の我が子が笑っていることを、私は心から願う。
その対価が何であつたとしても。

*

*

*

アリアはかつてないほどに追いつめられていた。
ヤバイヤバイヤバイ…。心臓が口から飛び出しそうだった。

アリアはメイド服を脱ぎ捨て、ミネルに借りたシルクのうす緑色のドレスに身を包む。
そもそも、貧乏貴族がパーティーに着ていけるドレスなど持っているはずがないのだ。

頭には金髪のカツラ。これも何故か、ミネルが持っていたのでありがたく使わせて頂く事にした。
ちよつとタイミングが良すぎる気がするが。

カツラがずれたら一発ではれる…。

そう思つてアリアは入念に鏡でチェックした。

「うう……………」

緊張の余り手を握りすぎて、招待状に皺が出来てしまった。アリアは慌てて皺を伸ばす。

「今の私はマリアナ・レイアス…。四大貴族の一つのレイアス家の末端の家の娘!」

アリアは何度もそう呟きながら招待状の字をなぞるように確認すると、パーティー会場へ足を踏み入れた。

正式なパーティーではパートナーを連れて入るのが普通なのだがそこまで公式なものではないらしく、一人で入っても良いらしいので助かった。アリアにはエスコートを頼める人間が居ないからだ。

立食式のパーティーでなごやかに貴族達が談笑している。

早速目についたグループに近づいて礼を取る。

「いいですか？とにかく所作は大事です。所作に生まれは出ると言っても過言ではありません。貧しい生まれだと美しく見えるように食事するといった発想は出ません。それとは逆に大貴族では、なるべくゆつくり動く事が上品だと見られる傾向があるのです」
クロウリーはそう言っていたのを思い出しながら、アリアは大機族の令嬢としてゆつたりと礼を取り、口を開く。

「マリアナ・レイアスと申します。今日はこのような素敵なパーティーに参加でき、その上あなた方のようなお人たちとお目にかかれること、光栄に思いますわ」

「あの誉れ高い四大貴族のレイアス家の令嬢と相見えるとは、こちらこそ、光栄な事」

「私もそう思います」「所作が美しい人ですわね。羨ましいですわ」
…

良かった何とか怪しまれずにすんだ…とアリアはまずホッとする。
ああ、でも忙しいのはこれからだ。

「いえいえ。私などは、レイアス家の中でも末端の存在で…」

「そんなご謙遜を。でなければこのパーティーに出席出来ません」
貴族って面倒臭いなあ。アリアは話ながらそう思っていた。
美辞麗句が会話の八割とは何と効率の悪いことであるうか。

何でこんなに遠回しに言わなきゃなんないのよ。
心がどつと疲れる。帰りたいそう思っていた矢先であった。

「キヤー、かつこいいですわ」「私と踊りませんか？」「あら、狡いわ。私とも踊って下さいな」などと黄色い歓声がアリアの耳に飛び込んできた。

何だろうと思つて、声のするように目を向けるとそこには。

「すいません。大変嬉しい申し出なのですが、残念ながら剣を振るしか能がない我らには貴女達のような淑女相手に満足に踊れませんので」といつて断りを入れているソレイユと、

「無表情で少し苛立ったオーラを醸し出すユーイ、つまり隣国の騎士達の登場であった。

第十四話：L e t ' s p a r t y ! バレたら即クビ（後書き）

クロウリーって本当はいい人なんです

次から、アリアとユーイ。

第十五話：ちゃんと踊ろう、Let's ダンス！！

「…」アリアは絶句した。

絶対目があったらばれるだろう。確実に。

まさかこんな所で顔見知りと会うと思っていなかったアリアは動揺した。

ちなみに、侍女たちはパーティーの準備こそするが、給仕はしない。身分もそこそこあり、きちんと教育を受けた給仕係という者がいて、こういった格式高いものは全て彼等が給仕を行うのだ。だから、心配いらなと思うていたのに…。

表面上はにこやかに笑っていたが内心冷や汗たらたらであつた。

そして、怖れていたまさかの出来事がアリアを襲う。

ユーイと目が合ってしまったのだ。アリアはすぐに目をそらしたかったが、今は大貴族の令嬢であるため、にこやかに微笑まざるを得なかった。

気付かないで。そう念じながら微笑むと、ユーイはサッと目をそらしてくれて一安心する。

よかったカツラ着けてて…。アリアは内心喜んだがその喜びはぬか喜びにすぎないのだとは気付かなかった。少なくともこの時は。

そして、気が付くと辺りから拍手が起きる。

「マリシア王女よ。なんて可憐な…」

そうだ、今回のパーティーにはマリシアが出席するのだった。
そして今がマリシアの登場の時らしい。

アリアも周りに習って手を叩く。上品にやらねばいけないので、拍手というよりは手を合わせたただけだが。

やや緊張した面持ちのマリシアは周りに手をひらひらと振る。その姿は妖精のように愛らしくピンクのフリルのついたドレスがよく似合っていた。

鬼でも微笑んでしまいそうな愛らしいマリシアを見て、ユーイも微笑んでいるのではないかと思つてそつとユーイの方を盗み見ると、ユーイは眉間に皺を寄せて拍手をしていた。

微笑みそうになるのを懸命に堪えているようでアリアは見ていて少しおかしかった。

そうしている間にマリシアは王妃に話を聞いていたのだろうか、アリアに気付いて少し嬉しそうにしていた。

アリアは妹がいたらこんな感じなのかなと嬉しく思いながら視線を送った。

情報も、…まあ、申し訳程度には集められたし、このまま何事もなくパーティーが終わればいいのにな、そう思つた矢先に事件は起きた。

「マリアナ嬢、どうか僕と踊って頂けませんか？」

そう、ダンスの時間である。

一週間特訓したのにもかかわらず、アリアは未だにダンスを何一つとしてうまく踊れずにいた。さらに、ダンスなんて激しい運動をしたら、カツラが取れるに違いない。

あわわ。どうしよう…。

勘弁して下さいとは言えず、咄嗟のことですぐまく答えられずにアリアが沈黙していると

「彼女は足を怪我していて、歩くのに支障はないのですが、ダンスなどの激しい運動は控えるように医師に言われているのです、そうですよねマリアナさん」

さつと声の聞こえる方向を見るとソレイユが微笑んで隣に立っていた。

ソレイユさん！！？なぜ！？

そう思いつつもアリアはせっかくなのでソレイユの出してくれた助け船に乗る。

「え、ええ…」

「それは、残念です。マリアナ嬢、また次の機会に誘いますので…その時はぜひ」

そう言って青年は去っていったのを見とどけて

「…あの」もしかして、バレています？

アリアはソレイユに上目遣いで恐る恐る呼びかけると

「まさかこんな所でアリアさんに会えるとは思っていませんでしたよ」

さらりと笑顔で言うソレイユ。

やっぱりバレていたか…。

アリアはがつくりと肩を落しそうになるも、お礼を言わなければと思

「…助かりました。ありがとう、ソレイユさん」アリアは礼を言った。

「いえいえ。それよりも、これはどういう事情ですか？何かの罰ゲームですか？」

ソレイユが直球で聞いてきた。

「えっと。違います。………まあ、言えないですけど。ふふふ…」

このことは内密にと言われているアリアは愛想笑いをして答えた。

「そうですか。まあ、大体の事情は分かりますけどね。あはは…」ソレイユもそう言っ

「怖い、この人。どこまで分かっているんだろう…。アリアは笑いながら思う。

「あはは」「うふふ」と乾いたわざとらしい笑いが二人を包む。

「とまあ、世間話はこれぐらいにしておいてですね…」

ソレイユが話題を変える。アリアはソレイユに翻弄されている気がした。

「驚きましたよ。本当にお綺麗ですね。隊長もかなり動揺していましたよ」

「へ？そうですか？…というか、気付かれていたんですか？」

「私は人の変装を見抜くのが得意ですから…。隊長も鈍くはないですしね」

「あちゃ…。まだまだですね、私」

思わず素が出る。アリアはだんだんと大貴族の令嬢であることを忘れてきた。

それにしてもバレバレだったなんて恥ずかしい。バレたのに演技を続けなければならないので、それを見られるのはもっと恥ずかしいが。

アリアはそんなことを考えていたので、ソレイユが何かを思い付いたというように、ほくそ笑んだ瞬間を知らない。

「そうだ、隊長を助けると思っついてきてくれませんか？」

笑顔でソレイユにそう言われたアリアは、ついユーイの役に立てるならと了承してしまった。

…これは、この微笑みは、メイと同じ種類の人間だと気付きながら。

ユーイの目の前に連れてこられてアリアは驚いた。

目の前にいるユーイは令嬢たちに囲まれていた。どうやらダンスの申し込みが殺到しているようだ。

ユーイの機嫌がどんどん悪くなっていつているのが目に見えて分かる。

「地位も名誉もあつてあのルックスですからね…不憫ですね」
「……」確かに気の毒なほどもてている。

「あそこにいるんで、助けると思つて隊長の名前を呼んで下さい」とソレイユが言う。

「え…あの状況ですか？」アリアは思わずソレイユに耳打ちした。さすがにそこまでの勇氣はアリアにはない。令嬢たちの恨みを凄まじく買つてしまいそうだし、ユーイも怒るんじゃないだろうか。

ソレイユは渋るアリアを見て、深刻そうな顔で言つた。

「そうです。…でなければ隊長はストレスがたまって禿げてしまいます。それを止められるのはアリアさんだけなんですよ」

アリアは驚いた顔をする。

「え、禿げてしまうんですか？そんな…確かにさらつさらの髪で将来髪の毛なくなりそうですけど」

「……！！」

ユーイの耳がピクツと動くのをソレイユは感じていた。そして、ソレイユを睨みつけるのも。

…本当に面白い。

ユーイとの付き合いはそれなりに長いので思つたことは手に取るように分かる。

ソレイユは無意識にまるで新しいおもちゃを見つけた子供のように笑つた。

そんなソレイユをよそにアリアは覚悟を決めていた。

「分かりました！私、やります」そう言ってアリアは二、三歩歩いてユーイに呼びかける。

「…ユーイ」

ユーイはアリアの声を聞いて少し躊躇っていた。迷っているようだ。

助け船を出しに来たのに。そんなに嫌われているのだろうか…アリアは少し落ち込んだ。

すると、ユーイは小さくため息をすると周りの令嬢たちに「連れが来たので失礼する」と言った後アリアの元に来た。そしてアリアの手を取る。

「へ？」アリアは驚いて、繋がった手を見る。

「…疲れた」

ユーイは一言そう言う、「撒くために踊るぞ」と会場の真ん中へとアリアを導く。

そこで貴族たちが集まって踊るのだ。

アリアは混乱した。

何でこんな事になっちゃうの？めちゃくちゃ令嬢たちに睨まれてるし、これは予想通りだが。

ユーイに手を握られていて逃げられないし…。アリアは混乱のあまり逃げることを考えた。

…ああ、もうしょうがない。

アリアは開き直すことにした。

「ね、これでユーイは禿げないんだよね？ソレイユさんが言っていたもの」と。

何の悪気もなくアリアは言った。先を歩くユーイの顔はアリアからは見えない。

メイ曰く『アリアは真面目すぎる上に世間知らずなのよね。何でも真に受けるし。あ、天然も入っているか。これほどからかいがいのある人間もそうはいないわ！』

ユーイは一瞬歩みを止める。そしてアリアの手を思わず強く握って、その後。

「…俺はジジイと同じ轍は踏まない」と言った。恐らくソレイユへの復讐を胸に誓いながら。

あ、祖父様の血筋なのですね…。アリアは口を開いて言おうとしたが言うべきではないかと思っけて口を閉ざした。

それよりも、問題なのは…。

「あの、私うまく踊れないの…」アリアはユーイに手を引っ張られながらもそう言った。

「問題ない、俺が踊れる」の一言ではつきり切られてしまう。

ダンスする場所に着いてしまったので仕方なくアリアは踊ることにした。

「笑わないでよ…」

演奏が始まった曲は、割と遅めのテンポのワルツ。戦争に行く恋人

と別れを惜しむ曲…。

全然状況と合ってない。ユーイはアリアのことすら覚えていないのに。

ユーイの手がアリアの腰に添えられる。ゆっくり二人は廻りだした。アリアは奇跡的に一回も足をもつれさせて転ばなかった。相手の足を何回か踏んでしまったが。

「すごいっ…。ユーイってダンスが上手いんだ…」アリアは感動しながら踊る。

「ソレイユの方が上手い。それにお前が下手すぎるんだ」ユーイは無表情で言う。

「うー。それは十分すぎるほど分かってる…」

そして、しばらく無言が続く。

ユーイは口数が少ないし、アリアに余り余裕がないためだ。いや、むしろ全然余裕はないが。

いつも以上に足取りが覚束ないのはカツラがずれてしまうのではないかと気が気でなかったのもある。

たまに、アリアの「ごめんなさい」と言うセリフが入る。もちろんユーイの足を踏んでしまったせいだ。

「…なんで、金髪なんだ？」突然ユーイがアリアに質問する。

「…変装」

アリアはユーイと目を合わせず、下を向いている。目が血走っているように見えるのは、気のせいだと思いたい。

ユーイは質問を続ける。

「なぜ、変装してまでここに？」

「……………試練？」

アリアの返事が片言なのはダンスに集中しているためだ。

最終的にユーイは聞き出すことを諦めて言った。

「…いや、もういい。お前の奇行は今に始まったことじゃない」

曲が終わった後、ユーイはさつとアリアの前から去ろうとした。

「あれ、ユーイ？何処に行くの？」とアリアが慌てて尋ねると

「疲れたから抜け出す」とユーイは答えた。

「私も疲れたからついていい？」アリアがユーイに聞くと、

ユーイは複雑な顔をした。

「お前、意味分かって言っているのか？」アリアはキョトンとした顔をする。

ユーイが言いたいのはつまりは周りから逢い引きをしていると勘違いされるといことなのだがアリアには理解できなかった。

かといって細かく説明するのが躊躇われたユーイは「もういい。勝手にしろ」と言って去ってしまった。

「…ちょっと待ってよ」

慌ててアリアは後を追う。久しぶりに会えたため、もっと話をしたいというのもあった。

けれど、それ以上に目を離すとユーイはまた、アリアの手に届かないどこかに行ってしまう気がしたから不安だったのだ。

第十五話：ちゃんと踊ろう、Let's ダンス！！（後書き）

ユイは地味に祖父の頭が寂しいのを見て、自分も将来こうなるのではないかと危惧しています。

ソレイユに知られてしまったのが運の尽き（笑）

第十六話：給仕姿の王子様

ソレイユがユーイとアリアが踊っているのを見て満足げに微笑んでいると、後ろから声をかけられた。

それは給仕の男だった。男は金髪で、長めの前髪は少し邪魔そう。目は恐らく青。身長は平均ほどでそこまで珍しい風貌ではないが、どこか人を引きつけるものを持っていた。

「あなたのような人がこんな所に何の用です？」ソレイユは振り返らずに言う。

「ちょっと恋の仲人をやっているところですが何か？」

ユーイが聞いたら斬りかかってきそうなセリフをいけしゃあしゃあと放つ。

「さしずめ恋のキューピッドですか？はっ。これほど善行が似合わない男もいないだろうが」急に男の様子が変わる。ソレイユはそれに対して反応を見せなかった。

「失礼ですね…。そっちこそ何の用ですか？こっちは忙しいんです。殿下」

殿下と呼ばれた給仕姿の男はふんつと鼻を鳴らした。

そう、ソレイユに話しかけた給仕は何を隠そうこの国の皇太子、マルス・レックス・デイ・プリウスである。つまり、次期国王。本来ならばソレイユは話しかけることすら出来ない。

「今は殿下って呼ぶな。…おや、あそこで踊っているのは君の所の隊長と…ああ。マリシアの友人Aか…」

「何なんですか、その友人Aというのは？給仕の男Bに言って欲しくないですねえ」

「誰が給仕の男Bだ！うちの可愛いマリシアが友人だと言っていたのだ。まだ僕は認めてないが…」

「相変わらずですねえ。マリシア様もこのような兄を持って大変でしょうね」

「なっ…」

ソレイユにとっては本来話しかけることすら叶わないはずの皇太子殿下であつたが…。

威厳が足りないせいなのか、その性格のせいであろうか。ソレイユからは敬意を払おうとする心構えすら感じられない。本人は、気付かぬばかりである。

「そうそう、それはそうとこっちの質問に答えて下さい。何の用ですか？」

「待て！今日はお前と舌戦をしにきたんじゃないんだ。大体お前と腹のさぐり合いをして勝てる気がしない。マリシアの様子を見に來ただけだ。久しぶりにお前の顔を見たから話しかけてみただけだ」

「そうですね。私が文官をやめてから結構経ちましたからね。昔と変わらないですね、ここは」

「…そうだな」マルスは追憶して、遠くを見るような目で返答した。

マルスがこの食えない人間と出会ったのはおよそ七年前。十歳の頃。ソレイユはマルスよりも四つ年上で、王妃である母と共に隣国を

訪れたときにマルスの遊び相手をしてくれた。

ソレイユは身分はそれほど高くはなかったが、その才は文武両道で二十年に一度の天才児などと呼ばれていた。マルスはそんなソレイユに憧れ、短い期間だったが大分懐いたものだ。あれが、ソレイユの表の顔とは知らずに。

ソレイユの素顔を知ったのは、それから三年後。マルスが十三才となり、少しずつ母の公務を手伝いだした頃のこと。貿易の取り引きについて会談を行うのについていったとき。

外務省の大臣と共に赴いた会談の席に隣国の使いとして座っていたのがソレイユだった。

思わぬ顔見知りを発見してマルスは純粹に嬉しかった。が、しかし……。

「関税の件ですが、もっと下げて頂けないでしょうか？」と、ソレイユが笑って切り出す。

「なぜです？充分押さえているつもりですが」

「はあ、その事なのですが。大変心苦しいのですが、どこかで不正が起きているとしか言いようがないのです」

「と言うと？」

「こちらの資料をご覧下さい。こちらが我が国の輸出品目です。例としては、そうですね。鉄を上げましょうか？

下のグラフに我が国での単価の値段が左に載っていますね。そのすぐ右が本来の関税をかけたときの単価であり、その値がこの国での鉄の単価と同じでないとおかしいはずです」

マルスはソレイユの指示通り配られた資料に載せられたグラフを見

る。確かに、本来の鉄の単価より、この国で売られている鉄の単価は少々高くなっていた。

「そちらの手を煩わせなくなかったので、勝手ながら調べさせて頂きました。

その調査の結果によると、我が国の輸出はもちろん、他の国からの輸出品もまとめて市場に送られるのですが、それからなのですよ。計算が合わなくなるのは。

その市場の元締めはあなたですね」

ソレイユが視線を送った先には外務省の大臣。全身から滝のように汗を流していた。

大臣は汗をハンカチで拭いながら若干焦って言う。

「は、はあ。そのようなことは初耳です。早速調べなければ……」

「私は『そちらの手を煩わせなくなかったので、勝手ながら調べさせて頂きました』と先ほど申したはずですよ。調べはついていますよ。調査結果はあなたに渡しておきましょう。まあ、あくまで複製したものです……」

恐らくこれを読めば、元締めであるあなたなら見当はつくと思います。王妃様に直接差し上げても良かったのですが……」

王妃に渡しても良いと言うことは、部外者が見ても十分に犯人を特定できるだけの証拠があるということだ。しかも複製を渡しておいて自分は原本をキープ……。

会議室の温度が下がった。主にソマリア国側の。

ソレイユは一端そこで話を切ると大臣の様子を窺うように沈黙する。大臣の顔色が青くなつたのを通り越して真っ白になっていた。血の気が引くとはまさしくこのことをいうのだろう。

「…まあ、この話は今は良いでしょう」

その言葉に大臣があらさまにホツとする。子供の俺から見てもバレバレだよ、オツさん。

どう見てもこの大臣、私腹を肥やすために不正を行っているようだ。

「というわけで、不正が起きていたということで、その分の関税を下げて頂きたいのです。我が国に非はないのですから。よろしいですね」

ニコツ。

ソレイユは微笑んで言った。

その目はちつとも笑っていなかった。否と言えば即座に調査書を王妃に渡して地獄の底まで落すだろう。間違いなくやるだろう、この男は。

大臣が震えながらコクコクと頷くとソレイユは満足そうに頷いた。

「いやあ、物分かりの良い方で良かったです。…これからも、何かとよろしく頼みますね」

「……………っ！！！」

会議室に戦慄が走る。

この男はこれからもこのネタで大臣を脅すつもりだと分かったからである。ヤバイ、このまま野放しにしたら、この国はあの男によって絞り尽くされるだろう。このとき、マルスは本気で国の将来を憂えた。

「本当にチョロいですね。わざわざ私が付け入るための隙を自ら作って下さるなんてね…。マルス。政治とはこういうものですよ」後で話しに行ったマルスに向かってソレイユは笑って毒を吐く。

それから、マルスは以前あったときの親切で優しくったソレイユを
思いだし、それから現実を見つめた。ああ、あれは何かの夢か幻か。

ソレイユと対決するたびマルスは善戦するも最終的には圧倒的な
力で負けてきた。あの、悪魔のような微笑みで勝利をかつさらって
いく男はマルスにとって最大のライバルであった。

ソレイユは相手の弱みを握るのが病的に上手い。悪魔と何かの契
約をしているのではないかと思われるほどだ。あと、それを使って
相手を効果的に脅すのも。

…前世は悪魔に違いない。マルスは勝手にそう思っていた。

「そうそう、マルス。ちょうど良いところに来ました。ちょっと会
ったついでに、君に頼みがあります」

ソレイユが思い出したようにマルスに言った。マルスは、ソレイユ
の声で我に返った。

すぐにマルスは断ろうとした。ソレイユの頼み事など、今までも
くな事がなかったためだ。

「それは断…」

「拒否権はありませんよ。聞いて頂けないようでしたら、マリシア
様に今までの君の所業を喋ります」

「くっ…それだけは…」

マルスも例に漏れずすっかり弱点を握られている。

「もし、この国に精獣使いがいるんでしたら、警備の強化を。さもないと…」ソレイユはそこで、口を閉じた。

マルスはその言葉の先を聞かなくても、言いたいことは分かったので、頷いた。

「…分かった。それはどうにかしておく」「後もう一つあります」「っ！！まだあるのか!？」

ソレイユはマルスに小さな声で何事かを呟く。マルスの目が見開かれた。

「……以上、これらのことを調べてみて下さいね」

「分かった。…ていうかソレイユ、お前どこまで分かっているんだ？」

マルスは恐る恐るソレイユに聞いた。もう一つの頼みを聞いてどうにも気になったのだ。

「聞きますか？」にたり、とソレイユが笑う。

「…やっぱりいい。……後が怖いから」

ああ、やっぱりこの男はやり手だ。

だから、マルスはソレイユを敵に回したくない。

だから…

「…戦にならなければ良いんだがな」マルスは呟く。

恐らくこのパーティーは様子見。各国が緊張状態の二国に対してどのような対応を示すのか探り合うために仕掛けられた、腹のさぐり合い。

マリシアがシス国へ行かねばならなくなった今、マルスは未来のことは分らないが嫌な予感を感じている。外れて欲しい、嫌な予感…。

「それはこちらも同感ですよ」耳聡いソレイユはマルスの言葉にそう告げた。

どうにも、何かの意図を感じるのだ。

まるで、獲物を丸飲みにするヘビのように、何者かが、二つの国を飲み込もうとしている、そんな気が。

その全てを知る術はまだ、ソレイユにもないけれど。

第十六話：給仕姿の王子様（後書き）

初期設定ではソレイユはツツコミ役で、マルスはクールな王子でした。

一体何が起こったのでしょうか？それは、作者でも分かりませんww

第十七話：ダンスの後で、暗闇に現れる謎の男

ユーイとアリアはパーティー会場の外に出た。

入った頃は昼過ぎで太陽も高かったのに、もう沈んで辺りが暗くなっている。

ユーイは、入り口と繋がっているテラスの端の方へ行き、手すりに背中をつけてもたれる。アリアもその後続いた。

「もう真っ暗…」アリアは手すりに腕をのせ、頬杖をつきながら言った。

「そうだな。ここらに一人でいると危ないから気をつける」

貴族にも不屈きな輩がいて、人目のつかないところに女を引っ張り込もうとする者もいるのだ。

ユーイはアリアに目をやる。アリアは空を見て、「星が出始めてる。キレイー」などと言ってにこにこ笑っていた。

「…お前みたいにぼうつとしてる女は特に」と付け加えた。

「私はそんなにぼうつとしてないわよ」アリアは少しむくれて言った。

「今日分かったんだけど…ユーイは昔と変わってないね」

アリアはふっと思つたことを呟いた。

ユーイはアリアが転ばないように気遣ってあえてゆっくり踊ってくれた。

今ここにいるときも危ないと言って忠告してくれた。

それは、アリアと別れる前のかつてのユーイを彷彿させたのだ。

それは、とても嬉しいことで…。

ユーイが知らない誰かになってしまった訳ではなく、ただ、時が経ったから変わったところもある、それだけの話だと思えるから。

それだけなら、きつと…また元通りになれる、そんな気がするから。例え、記憶が戻らなかったとしても、約束が果たされないとしても。

その瞬間無表情だったユーイの表情が固まる。アリアは気付かないまま話を続けるようにする。

「優しい所とか…」

「うるさい」ユーイが固まった顔のまま言う。

「えっ？…そんな私は、別に…」

アリアは驚いた。ユーイはアリアの言葉など聞こえないように声を荒げて言う。

「煩いって言っているだろう。俺のどこが昔と変わらないっていうんだ！？知った風な口を聞くな！！」

ユーイの顔は何か、苦しんでいるように思えた。少なくともアリアには。

その翡翠の瞳に何を見ているのだろうか、そう思った。

ただ、それを知るために、ユーイの心を傷つけることはアリアには出来なかった。

だから、深くそれに触れない。触れられない。

「…ごめんなさい」

前のような初めて再会したときのような恐怖はない。

ユーイは昔のユーイと変わったところはあっても、きつと根本は変わっていないのだと分かったからだろうか。

アリアはゆっくりとユーイに言った。

「ユーイは良い意味で変わってないと思ったただだから…嬉しかったの。」

ユーイは私のことを覚えていなくても、私はユーイを覚えているか

ら、今までずっと心配だった。だから、会えてよかった…それが言いたかったの」

ユーイはフツと力を抜いた。我に返ったのか、何なのかアリアにはよく分からないが雰囲気が和らいだのを感じてとにかくホッとした。

「昔の俺は…弱かった」少し落ち着いたらしい、小さな声でユーイは言った。

「そうかな？」アリアは首を傾げた。

ユーイが弱い？確かに昔は気弱な感じだったけれど、それは弱いということではない。

むしろ、腹をくくったら一番無茶するのはユーイで、アリアは時々それに振り回されるほどだった。

「私はそうは思わないよ。今も昔も」

ユーイは少しだけ目を見開く。でもそれはかすかなことで、誰にも分からないほどだった。

「まあ、ユーイにしてみれば、知らない人にそんなこと言われたって困るだけだよな」

アリアはユーイの顔を見ないまま話し続ける。

「…そうだ。私、ユーイに謝らなきゃいけないことがあるの」

「……」

「ユーイが記憶喪失だって知らなくて、泣いたりしてご免なさい。そりゃ、覚えてなくても無理はない話なのに。なのに…私は」

「お前が謝る必要はない。…俺が悪い」

「ユーイは悪くないよ。………記憶がなくなっただってユーイだし」
アリアがぼつりと言った。

「
」
二人は黙ったまま外の景色を眺めた。
アリアは不思議な気持ちだった。こうして、二人で景色を眺めるのは決して初めてではなかったのに、まるで初めてののような気持ちになったから。

今まで別れていた時の空白がそれを、もたらすのかもしれない。

アリアは足下が覚束なくなつて、手すりに体を預ける。
頭がぼんやりとして、景色もぼやけていくように感じる。色々なことが頭を巡る。

そうだ、フェリキアのこととか、聞かなくちゃ…。ユーイとゆっくり話す機会がこれからもあるとは限らないのだから。アリアが隣国へ行くとしても、ユーイと会うことは必然ではないのだ。

「……？」

その時、アリアの目の前の木が歪んで見えた。
あれ、おかしいな。景色がぐるぐる回つて…。気持ち悪い。

「お前は…もし…」ユーイがそう言いかけた時。

アリアはユーイが何を言っているのか聞こえなかった。ただ、力が抜けていくのを感じた。

「…おい！……返事…を……し……、丈…夫……」

ユーイの声がどこか遠くに響いていく感じがして、そのまま、アリアの意識は暗い闇へと沈んでいった。

*

*

*

ユーイは驚いた。

「お前は…もし…」思わずアリアにそう言いかけたことも。

「……………っ」

手すりにもたれていたアリアの体がバランスを崩し、そのまま…アリアが倒れたことも。

「おいっ……………！？」

ユーイは崩れ落ちるアリアを床に体を打ち付けてしまう前に抱きとめた。その体が、熱い。熱があるのか……。

「大丈夫か！？返事をしろ」

アリアはぐったりとして、反応がない。

顔色も悪いようだ。あまり寝ていないのか、隈ができている。隊長であるために常に部下の体調を見ているのに…。

そういったことに鈍くないはずの自分が今の今まで何故気付かなかったのか、疑問に思う。

「何で、こんなにボロボロなんだ…………？」

ユーイはアリアの地獄の特訓のことを知らない。訳も分らずに少し混乱するユーイだが、結論はすぐに出た。

とにかく、医務室へ運ばなくては。

ユーイはアリアを抱き上げると医務室へと向かった。

「どうなさいましたか？」

ユーイがアリアを抱えて医務室にいと看護婦が問う。しかし、すぐにぐったりとしたアリアの様子を見てユーイが答える間もなく

「……。どうやら、急患のようですね。どうぞベッドの方へ」

そう言つて医務室の奥にある六つ程あるベッドのうちの中でも一番奥の一つの方へ案内する。

「知り合いの方ですか？」アリアをベッドに移したユーイに向かって看護婦は言つた。

「……………まあ」

少し迷つてユーイは返事をした。

「それではちょうどいいですね。熱があるようなので、私が熱冷まし

の薬を取ってくる間様子を見ていて頂けませんか？」

「いや、ちよつと待……………」ユーイが言い切る前に

「では、よろしく願いますね」

看護婦はユーイの返答も聞かないで去つてしまった。

「……………」

ユーイはアリアをそつと見る。

顔は赤く染まり、まぶたは閉じられたままで、黒くて長い睫毛が小さく震えている。そして、小さい寝息。…どうやら眠っているようだ。

そして、首には例のペンダントがあつた。

ユーイにとっては楽しかった記憶や嬉しかった記憶と、嫌な記憶、思い出したくない過去まで込められている、因縁の物だ。

今まで、思い出さないようにしてきたのに…。事実、アリアに会う

までは意識していなかったのに。

ユーイはそれに手を伸ばして触れようとする……が

『母も、妹も、守れなかったお前に今さら何が守れるというのか？
守れないのなら望むな。それがお前にとっても、お前の大事な者にとっても最善だ』

その手は途中で止まる。忌まわしい記憶が、言葉が、ふと蘇る。

「……………分かつている」

いちいち思い出さなくても。

「……いつまで、そこで黙っているつもりだ？用があるんだろう？」
ユーイは背後に向かって言った。

医務室の扉のすぐ横に男が一人立っていた。銀色の短い髪をした男は右頬に十字の傷があった。目は鋭い闇のような漆黒。そして、首には奇妙な文字のような黒いタトゥーがいれられている。

そして、黒い衣服を身に纏うその様はまるで死に神のように見えた。腰には二本の細身の刀が下げられており、その立ち姿に隙はない。

男は笑いながら言った。

「いや、気付かれていたとは思わなかったな……。さすがはあの方の息子！」

息子と言われてユーイは心底嫌な顔をする。

「あいつのことは関係ないだろう？俺はあいつが嫌いだ」

「…さいですか。俺は呼びに來ただけですよ」

「そうか…」

「じゃ、そろそろ行きましようか？まだ、仕事が残ってる」

「……」

ユーイは返事をしないで黙った。目線はアリアに注がれている。動こうともしない様子に男はため息をつく。

これでも、譲歩しているつもりなんですけどね、男は言った。

「…分かっていますよねえ？自分の立場」

ユーイは最後にアリアの方へそつと盗み見るように目をやった後、返事する。

「……………ああ」

ユーイは銀髪の男が歩くのに続いて歩き出した。そして、もう二度と、アリアを見ようとはしなかった。

第十八話：パーティーの後で、我に返ったアリア

「……………何か、前もこんな事があつたような？」

ベットの上でアリアは呟いた。

アリアが目を開くと、もう朝だった。しかも、朝日はだいぶ昇っているようだ。

「ああ、起きられましたか？あなたは、昨日のパーティーで体調を崩して倒れたのですよ。お連れの方がここまで運んで下さったので、覚えていないかもしれませんね」

看護婦がアリアが起きたことに気付いて声をかける。

いつの間にかカツラもドレスも脱いでいる。おそらく看護婦さんがしてくれたのだろう。アリアは今、医務室に置いてある簡素なドレスを着ている。

つていうか、私がカツラをかぶっていたことに対して突っ込まないんですか？

そう思ったアリアは聞いてみたいが、逆に自分が墓穴を掘りそうなので諦めた。

「……………そうなんですか？」

うーん、全然覚えていないんですけど、途中までしか。アリアは昨日の記憶を辿り始める。

確か、ユーイと二人で、外で話していて…いつの間にか…ふらふらして……………。

せっかくフェリキアの事とか聞けるチャンスだったのに、勿体ない

！アリアは悔しく思った。

あれ？もしかすると。

「あの、ここまで運んできてくれた人って、金髪で緑目で騎士の格好してませんでした？」

「はい。そうですよ。途中でいなくなってしまわれましたが、ところで、お体の具合はいかがですか？熱っぽいとかだるいとか、ありますか？」

「ええっと。体調はむしろいいです」むしろ昨日よりもずっと体が軽い。最近寝ていなかったせいだろうか。……じゃなくて。

アリアは一度に色んな事が頭に入ってくるので情報処理が上手くできない。

アリアが倒れるまではユーイと一緒にいたわけで、そして、運んできてくれた人の心当たりは一人しかいないわけで。

つまり、その、…ユーイが運んできてくれたのだろうか？

「…何だか顔が赤いですけど、本当に大丈夫ですか？」

「………赤くはないです。むしろ普通です！大丈夫です！……」

アリアは慌てて言い繕うと、看護婦は薬を渡す。

「取りあえず、この薬を渡しておきます。滋養強壮剤です。食前に飲んで下さいね。

あと疲れがたまっているみたいですからちゃんと、寝て下さいね。無理は厳禁です！」

「…分かりました」
もう三度も、このような失態は犯したくない。…恥ずかしすぎる。
アリアはそんなことを誓いながら返事した。

アリアは侍女練に戻った。

メイはすでに仕事に行ってしまったらしく、部屋には誰もいないため、いつもより部屋が広く感じられた。アリアは、いつもの制服に着替える。

いつもの時間なら、クロウリーの授業を受けている時間だったろうか。

そう思ったアリアは取りあえず授業の部屋に向かうことにした。

「遅いですよ」

部屋に入るなりクロウリーがアリアに言った。その手には分厚い本。どうやら、アリアが来るまで読書をして時間を潰していたようだ。

アリアは、遅刻の理由を説明しようとする。

「すいません。実は昨日のパーティーで…」

「ああ、知っていますよ。体調を崩して倒れたのだとか。私の情報網を舐めないで下さい」

「…すいません」アリアは謝った。体調を崩してしまったことも、そのせいで予定がずれてしまったのも、アリアのせいだからだ。

「何を謝っているんですか？ 誰しも体調ぐらい崩しますよ。…ただ無理をしすぎはいけない」

「え？」よりによってあのクロウリーに無理をすると言われ、アリアは戸惑った。

「大体密偵をするに当たって体調を整えるのは最低限かつ非常に重要なことなんです。でなければ、とっさの判断を誤ることもありま
すし、それが、敵に情報を掴ませてしまうことにもなるのですよ」
なんだ、密偵のため…。アリアはホッとした。
クロウリーがアリアを気遣うなんて、むしろ怖い。怖くて夜も眠れ
なくなりそうだ。

「でも、私は、課題のための時間とか、やることがあって…睡眠時
間を削らないと出来なくて…」

「それがいけないんです」

「課題の時間を短縮するために何でも利用しなければいけません。
何故私に質問しないのです？それだけじゃない。貴女には多くの気
遣ってくれる友人がいるでしょう？何故彼等に頼らないのですか？」

「……そんなに迷惑かけられません！」

アリアはクロウリーにそう言った。これは、密偵になるということ
は、アリアの勝手なのだから、誰にも迷惑をかけたくなかったのだ。

「それで何にも言わずに勝手に進んでいつて倒れられる方が心配に
なるでしょう。むしろそっちの方が迷惑ですが」

「う………」

確かに、その通りだ。

アリアはぐうの音も出なくなつて黙る。

「……………確かに、その通りですけど。でも、」

「でもじゃありません。今日の授業はお休みです。しっかり体調を
整えて下さい。」

貴女は一応やれば出来るんですから、一日休みがあれば充分ですよ
ね？」

「…はい」

アリアは渋々返事をした。体調はもう良いというのに。

「パーティーで得た情報は後で聞きますから、今は部屋で休んでいなさい」

そう言われたアリアは部屋へとすすぐと帰っていった。

*

*

*

「どうだった？何か分かることはあったかしら？」

王妃はアリアに悪戯っぽい瞳で問う。

次の日の朝、つまりパーティーが終わってから二日後のことだった。アリアはマリシアの部屋へ行く時間で、王妃との謁見をしていた。

「はあ…一応」アリアは少し自信なさげに答えた。

まだ一週間しか時間がなかったというのは言い訳になるのだろうか、とアリアは思う。

「物価が上がり始めているそうです。特に、小麦と鉄、塩。後…」アリアは考えながら言う。

他にもいくつか…。どこそこの領地が水害で、どこそこの貴族が税を横領しているらしいといったうわさ話を細々と話す。

王妃様もこれぐらいなら把握しているだろうなもしくは耳に入れる価値はないというレベルだ。

「あと、覚えているのは…時が我らに味方するだろう、とリーディアナ国の人が言っていました。盗み聞きで前後がよく分からなかったですけど」

リーディアナ国はソマリア国の西にある大小五十余りの島からなる島国だ。

その立地を生かした貿易と、リゾート地としての観光業が盛んな国だ。

ソマリア国は海に面した国なので、海を挟んだお隣さん。と言っべき存在である。

「ふうん。それってどんな人が言っていたの？例えば服とか…」

「うーん…。普通の貴族の格好で、リーディアナ国の紋章をつけていて……」

アリアは記憶を思い返しながら辿るように言った。

二人の男が隅の方でこそそとと言っていたので記憶に残っているのだ。壁の花になっていたアリアは暇つぶしにちよつと聞きかじることしかできなかったが。

「付けていた腕輪が、青かったです」変な色の腕輪があるものだ。滑らかで、けれどもシンプルな作り。やはり外国の人というのは見ていて飽きないなあと思っていた。

「…そう。ありがとう。参考になったわ」王妃様が笑って言う。その言葉に照れてアリアは赤くなる。

「いえ。大したことではありませんから」

「あら、そうとも限らないわよ。もしかしたら…の話だけど」

どういう事か分からず、かといって聞くことも出来ずアリアは黙って首を傾げていた。

第十九話：出発のとき、揺れる心

アリアが授業を受けてから、三週間後。ついに明日、マリシアが隣国に立つ。

アリアはパーティーという名の修行の後も授業三昧であったが、それも今日で終わりだ。

「…これで、教えるべき事を最低限伝えました」クロウリーが心なしか優しく思える。

心なし程度だが。もしかしたら気のせいかもしれない。

「…はい」アリアは少し涙ぐみそうだった。今まで苦手でしかったクロウリーだが、明日でお別れと思うと少し寂しく感じるようだ。

「あなたの明日向かう場所は敵地も同然です。逃げるとは今さら言えません。…だからせいぜい足掻いて生きて帰ってきて下さいね。まだまだ教えなければならぬことがたくさんあるのですから」
「……!?!」

今日は矢でも降るんじゃないだろうか、クロウリーさんが優しい。

アリアは驚きながらも喜んでいた。自分の努力が認められたような気分だ。

「…はい！必ず帰ります」アリアは元気にそう、クロウリーに告げた。

そして、精獣講座最後の授業。ミネルは悲しそうな顔をしていた。
「今日で、アリアさんとはお別れなのです…。せつかくお友達になれたのに」

「はい。私も寂しいです。ミネル様。また会えますから、どうか、お元気で」

「御免なさい。私、あまり精獣のことを貴女に教えられなかったかもしれないわ」

「そんなことはないです。私が【対話】出来ないのは、私のせいです。自分の心をよく知らない私が悪いのですよ」

そう、アリアはまだフレアと【対話】するに至っていないのだ。心を近づけるための訓練は積んだものの、向こうで役に立つかは分からない。

心の在処…。グランにいわれたその言葉をアリアはまだ、理解できていない。

もしかしたら、フレアはユーイの精獣なのかもしれないと思い始めていた。

でも、その不安をミネルに見せるわけにはいかない。

「大丈夫です！フレアだって今のままでも充分強いですから。マリシア様はちゃんと守ります」

アリアは明るい声でミネルに言った。ミネルの表情も少し明るいものになる。

「ええ…。分かっていますわ。ただ…。私が寂しいだけなのです。必ず戻ってきて下さいね」

「はい、もちろんです！私、馬車で酔いやすいのでそっちの方が心配なんですよ」

「あら、私も馬車酔いに弱いだよ。揺れない馬車ってないのかしらね」

「……………空飛ぶ馬車、とかですか？」

「グランならやってくれるかしら？」

アリアはグランが馬車を引いているのを想像する。確かに空は飛べそうだが…

「さすがにそれは…可哀想では？」

「ふふ、それもそうね」ミネルは笑う。

しばし、二人はそんな感じで無駄話をする。

「……………気を付けて」

ミネルは去り際にアリアに向かって言った。

「もしかしたら、危険なのはマリシアではなくて、あなたのほうかもしれない」

その時、アリアにはミネルの言葉の意味が理解できなかった。

アリアはソマリア国を離れる前日の夜、落ち着かなかった。

両親へ手紙を書いて、準備は出来て後はもう寝るだけだ。それなのに目が冴えて、目をつぶることもままならない。

「…メイ、起きてる？」同じ部屋で二段ベッドの上にいるメイは返事を返さない。眠っているのだろうか。

「……………」反応がないのでアリアは再び布団に潜ろうとした。
「アリアの馬鹿ぁ。どうして……に行っちゃうのよ……」メイの寝言のような声が聞こえて、布団を掴んでいた手が停止する。

メイは思えば、アリアに文句を言ったことがなかった。

アリアがどんなドジを踏んでも、失敗しても受け止めてくれた。

ユーイと会ったあの日だって。アリアが泣き出して去ってしまったのを、キッチンと訓練場を何回か往復してアリアの仕事までやっておいてくれた。アリアが泣き出しても抱きしめて励ましてくれた。アリアが王女付きの侍女になったって、嫉妬せずに笑って祝福してくれた。

「メイ……………」今までありがとう」涙声になってしまったかもしれない。そもそも本人は寝ぼけて聞いていないかもしれない。それでも、アリアはお礼が言いたかった。

せめて、アリアがここから居なくなってしまう、その前に。

*

*

*

隣国の大臣と一緒に騎士団に護衛されながらマリシアはシス国へ向かう。

騎士たちはシス国の騎士が一五名。ソマリア国から騎士が同数派遣される。マリシアの護衛のためだ。

侍女たちも数人連れて行くので合計して四〇人ぐらいの大所帯での旅になるわけだ。荷物を乗せる馬車の大きさからもその多さがよく分かる。

そんな感じでマリシアはシス国に行くのだが、その行程は距離以上に長いものがある。

まず、馬車に乗るまで。

城から出ると、正門まで貴族たちが列をなして見送ろうと構えている。

マリシアはまず、馬車に乗るまでに普通に歩けば二、三分の道をニコニコ笑って手を振りながら十分以上かけて歩かなければならない。

面倒臭！という話である。アリアは自分は王族でなくて良かったと思う。心の底から。

次に、馬車に乗ってから。

マリシアが乗る馬車は五日ぐらいの旅になる。三日目で宿場町に止まることが出来るらしいが、基本的に野宿になる。そのため王族御用達の最高級馬車の中でも人が十人ぐらい乗れそうじゃないかっていうぐらいの馬鹿でかい客車に乗るのだ。

アリアも王女付きの侍女ということで王女の世話のためにのせて貰えるらしい。役得だ。

その馬車の中から、正門を抜けて、町を出るまでマリシアはズーッと手を振ってニコニコしなければならぬ。町の人達も見送りに来ているからだ。

……ほとんど、パレードじゃない、これ？

アリアは予定を聞かされたときに思った。話によると、屋台や出店が並び、そのために警備を増強するほどだそう。

二国間が緊張のさなかで……何とも見上げた商人魂だ。稼げるときに稼ごうという魂胆らしい。さすがは商業の国、ソマリアの商人たちだ。

この間、およそ、一時間。普通に行けば三十分足らずな道を、である。

アリアならきつと筋肉痛になるだろう。手を振りすぎて。顔は笑顔のまま固まりそう。

「マリシア様、ご愁傷様です……」

未来のマリシアにアリアは合掌した。

馬鹿でかい客車はそのまま泊まれるようにベットなどもあるらしく、かなり快適らしい。

それを引くのに馬は六頭必要だが。人生に一回あるかないかの経験だ。

アリアは取りあえず、その事を楽しみにしていた。

そして、マリシアの出発が始まり、王女付きの侍女ということで馬車の中で世話をするという名目でアリアが先にいざ馬車へ乗り込んでみたとき。

アリアは目を点にした。そして、目を擦った。

…ああ、私ったら、疲れているのね、きっと。なんか、有り得ないものが見え…

「やつほ、アリア！元気だった！？」

メイが手を振って馬車の中に置いてある備え付けの椅子に座っていた。

「……何故あなたがここに！！？」

「そりゃ、私も隣国に行くんだもの、当然よ！」

アリアは開いた口がふさがらない。それってどういうことですか？

アリアはきつと今なら、何が起きても信じられると思った。今日の前で起こっていること以外なら。

第二十話：メイの正体

「何で隣国に行くのよ!？」

「マリシア様と一緒に留学しようと思って、ね」

メイがしれつと放った言葉にアリアはさらに混乱する。

侍女としてならまだ分かるが、王女と一緒に留学？相当位が高い貴族でないとそんなこと無理だろう。

…そういえば、メイってどこの家の娘？メイの名字を聞いたことがないのにアリアは今さら気付いた。

メイって…一体何者!？」

「今まで黙っていたけど私の名は、メイ・レイアス…これだけ言えば、分かるよね？」

「レイアス家!？」…ソマリア国の四大貴族の一つ。アリアはそこから偽名を使ってパーティーに参加したわけだが…。もしかしてアリアの心に疑惑が生まれる。

「さらに言うと最近王妃様から依頼されて、一枚偽造の招待状を作ったんだけど…」

その疑惑は確信へ変わった。あの、招待状…。メイが作ったものだったとは。

つまり、メイは何らかの意図があって侍女に扮していたけれど、実は大貴族、レイアス家の令嬢だったということか。

「…聞いていないんだけど!」

「ごめん、忘れてた」「忘れないでよ!!!」

「っていうか、アリアがまさか王女付きの侍女になるなんて思っていなかったから。その後のアリア、……………色々やばかったし。言うタイミングを見失ったっていうか…」

「なんで、初めから言ってくれなかったの？メイはレイアス家の娘だなんて」

「だって、邪魔だったんだもん。あんな大層な家名、あるだけ邪魔ね」

「……邪魔って……」

大貴族、レイアス家の家名を邪魔と一蹴するメイにアリアは言葉を失う。

「……アリア、怒ってる？」

メイがアリアの顔を窺うように尋ねた。アリアは頭を抱えたまま答える。

「……怒ってるというよりも、混乱してるんだけど……。今までの態度……怒られたりしないかな？」

うーん、うーんと頭を抱えるアリアにメイは少し笑った。

アリアは、自分がレイアス家の令嬢と分かってても、メイに敬語を使って距離を置いたりしないから。それが、どうにも嬉しすぎて、顔に出てしまう。

そもそも、レイアス家直系の血筋であるメイにとって、欲しいもので手に入らないものは存在しなかった。否、存在しないに等しかったのだ。

「……つまんない」それはメイの小さい頃の口癖だった。

鬼ごっこをしても、小さな子供たちは親に言われているのか決してメイを追いかけしてくれない。おままごとをしても、メイの言う通

りに従うだけ。その何処が面白いというのか？

小さい頃にメイは自分と遊ぶということがどれだけ子供たちにとって苦痛なことか嫌と言うほど味合わされた。

だから、欲しいものカテゴリーの中に『友達』という言葉を真っ先に消去した。

欲しくても、手に入らないのなら初めから欲しない方が幾らかマシだと思っていたからだ。

それでも、心の奥では違ったのかもしれない。道楽として、侍女の振りをして、身分を偽ってみるという遊びを思い付いたのはやはりどこかで寂しかったのだろう。

そこで出会ったのがアリアだった。

初めは暇潰しのつもりだった。いい玩具を手に入れたような感覚だった。

有り得ないほど純粹無垢で、真っ直ぐでそのくせに割と恐がりで泣き虫なアリアは人間観察を趣味としていたメイにとってまさに渡りに舟、興味深い存在だった。

それがいつからだろう、おもしろ半分で始めた幼なじみ捜しが本気になったのは？

アリアにつく悪い虫を追っ払うために権力を使い出したのも。

アリアといると楽しくて、我を忘れそうになるのだ。

ああ、どうしよう。欲しく、なってしまうかもしれない。

そう思ったときはもう手遅れだった。メイは『友達』を得る方法を知らない。金と権力で手に入らないものを得る手段を、メイは知らないのだ。

怖かった。

アリアがメイのことを知って、アリアが他の人達と同じようにメイと距離を取ろうとするのが。

それで、二の足を踏んでいた時に、アリアは王女付きの侍女になった。

そして、あっという間にメイの手を離れてシス国へ行ってしまうと分かったときにメイはこのままではいけないと思った。

メイはアリアよりは情勢にくわしいし、貴族の世界も渡り歩いていくだけの経験もある。

だから、メイはアリアを助けようと思った。

何よりも、アリアが血も涙もないあの世界で泣いてしまうことがないように。

まあ、無茶を通すために、家名を使つたため、メイはもう侍女ではいられなくなってしまった。留学ということで、一緒にシス国へ行く事へとなったのが、少し不満だが。

これは、メイの勝手だ。

怒られることも、嫌われることも覚悟してやった。それでも、アリアを少しでも助けられるのならどうでも良いことだった。けれど……

「……やっぱり、どこまでいってもアリアはアリアね」

この可愛らしい親友は今も、うんうん唸っている。

言っている内容はメイはお嬢様なのに、あんな事やこんな事をさせてしまった。早く自分に言ってくれたらどうにか出来たのに、と言っている。

……私の方が、アリアより仕事が早いのに、百年早いわ。

なにやら、昨日の寝言と話が違うだのよく分からないことを言っているが……。……寝言？

昨日の夢は、確か、アリアが結婚しちゃう夢を見た。ああ、嫌だ。いつの間にか話が進行していて、気が付かぬ間に結婚まで……。ああ、勿体ない！ ウオッチングしたかったのに！

どうして、そんなに早く嫁に行っちゃうのよ！ 馬鹿！とは思ったが……いったい何のことだろう？

アリアは決して変わらない。例えメイが大貴族だったとしても、何一つとして変わらない。

だから、メイは変わらずにいられる。

だから、メイは変わらずにアリアの友達でいるためにこんなに必死になれるのだ。

第二十一話：出発の時、それぞれの思惑

「アリア姉様？」

マリシアは馬車へ乗り込むと、アリアがなにやら考え込んでいる様子だったので思わず声をかけた。

マリシアが、馬車に乗ると、御者が鞭を振るって馬車が動き出す。そして他の、大臣や侍女たちの乗る馬車がいくつか連なって滑るように進んでいく。王女の馬車が先頭で、後方で貴族がいるのが見えた。

その前後を騎士たちが馬に乗って守るようについている。状況が状況でなければただのパレードのようだった。

が、アリアはそんなことに構う暇はないとばかりにそれでも尚頭を抱えていた。時折ため息までついて。マリシアが声をかけたというに返事をする素振りすら見せない。

「…何であんな紛らわしい寝言を……ってマリシア様！？」

アリアはマリシアの存在に気付くと素っ頓狂な声を上げた。

「どうしたのですか、アリア姉様？気分でも悪いのですか？」

「…いえいえ、別件でちょっと揉めただけです。お構いなく」

すかさずメイがアリアの代わりに答える。マリシアは目を瞬かせた。

「別件って…？」「ああ、ところで、なぜ、アリアのことを姉様と呼ぶのか説明頂きたいのですけど」　メイはマリシアに口を挟ませないよう、封じようとする。

このままつやむやにするつもりか。

メイの十八番、『適当なこと言ってつやむやに押し切ろう』作戦だ。

大方、侍女を密かにやっていたという事実を伏せておきたいのだろう。大貴族の令嬢が侍女をしていたと知られたら問題になりそうだからだ。

マリシアはメイをじっと見つめて答える。

「……私の我が儘ですわ」

「そうでございますか。紹介が遅れました。対面は初めてではありませんよね？私の名はメイ・レイアス。レイアス家の長女にございます。アリアとは仲の良い友人なのです」

「……丁寧な自己紹介をありがとうございます。私の名はマリシア・チェリア・デイ・プリウスですわ。これから長い付き合いになるのですから、余計な敬語はいりません。どうぞ、楽に過ごして下さいまし」

いつもこうやってメイは都合が悪くなると話をずらす。話題のすり替えがやたら上手いというか、話の主導権を握るのが上手いのだろう。

「そうですか、ありがとうございます。……何黙っているのよ、アリア」

「……メイが、ともに敬語、使ってるの初めて見たから、珍しくて」

アリアは珍しいものを見る顔でメイに言った。メイは胸をわざとらしく反らしてにんまりと笑う。

「へへん！アリアよりは上手く敬語使えるわよ、ワタクシ。これでも受けた教育は悪くないのよ」

「なにをー！私だって三週間ぐらい地獄の授業受けたんだからね」
アリアも負けじと言い返す。

「ふふふ……」

メイとアリアはマリシアが笑いだしたので、言い合いを止める。
マリシアは、ちょっと恥ずかしそうにアリアたちを見る。

「羨ましいですわ。私もそんな感じに話してみたいですわ」

「そうですね、マリシア様ならすぐに出来ますよ。アリアの真似をすれば良いんですから」

メイが能天気になつて、アリアはメイをたしなめるように、
「それって暗に私が庶民だつて言いたいのか？メイ？」

「いや、私そんなの全然、欠片も思つてませんわよ。オホオホ」
アリアは言い返そうとして、はたと、今の状況を思い出す。馬車は
町へともう出ているのだ。

「……あ、マリシア様！手を振らないと！」マリシアに告げる。
マリシアはキョトンとした顔をして言つた。

「……あら、忘れていたわ。だつて面倒なんだもの」

「……」アリアは言葉を失つた。メイがこそつと呟く。
「……マリシア様も言うわね」

町の人達は窓から姿を見せないマリシアを気にせず騒いでいる。
活気に溢れた声や音が壁を隔ててその事を告げていた。

もしかして、手を振らなくても大丈夫なのか。どうやら基本的に騒
げたらそれで良いというものらしい。

じゃあ、良いのかな、と思つたアリアはマリシアにそれ以上何も言
わなかつた。

ただ、こんな調子で大丈夫かな？ちよつと先行きが心配になつた。
メイの適当な所がマリシア様にうつらなきや良いけど。
そう思っているとメイが唐突にアリアに質問した。

「アリア。馬車の旅は長いから、暇だしあの話して。幼なじみ君と
は会えたんでしょ？その後めつきり話を聞いていないんだけど。ど
うなつたの？結局」

メイはやたらと生き生きとした顔でアリアに迫るようにして聞く。
確かに初めて会つた日にメイにはユーイと会つたことを話してい
たけど、それ以降話をしていないことにアリアは気付いた。

「え……」

アリアはとつさに後ずさるうとするも壁に当たり、逃げ場がない

と再認識する結果に終わった。広いとはいってもやはり馬車は馬車だ。

「幼なじみ？一体何の話ですか？」マリシアも興味を示す。

「えっと……」

アリアはこの状況をメイのようにさらりと返せるほど器用ではなかったため、折れざるを得なかった。

「私には幼なじみがいて、その幼なじみと別れるときに約束をしたのです。再び会おう、と。このペンダントがその証です」

アリアは首にある鎖を引っ張ってペンダントを取り出し、マリシアに見せた。

ユーイと会った日からペンダントは首から下げて、服の中にしまい込むように隠している。そうでなければ何となく取られてしまいそうな気がしたからだ。

「綺麗な赤色ですね。それにとってもロマンチックですね。本の世界のようです」

マリシアは目を輝かせた。そこで、メイが割り込むように語り出した。

「でも、それから幼なじみは全くもって音沙汰なし。心配したアリアは健気にもその幼なじみを捜しに侍女勤めをする事に決めたのです」

アリアはメイに文句を言った。

「……何で、メイが入ってくるのよ」「私のほうが説明は得意だから。ドラマチックに、泣けるように説明してあげるわ」「ちよっと、そっこのはいらな……」

メイはアリアを無視して語り口調でとつとつと話し出した。

「アリアはその時思っても見なかったのです。その結果、幼なじみと運命的な再会を果たす事になるうとは……」

マリシアがごくり、と唾を飲む。

あ、もう止められない。アリアが諦めた瞬間であった。

「そんな事情がアリア姉様にはおありになったのですわね……。マリシアは驚きましたわ」

マリシアはグスグス鼻を鳴らしてハンカチを目に当てた。その後アリアは抵抗する気力も失せて為されるがままだった。

「我ながらになかない語りだったわ」メイは一仕事しましたという顔で満足そうに言った。

「……何でそんなに声色使い分けられるのよ」

メイの語りはもう声の抑揚から高低まですっかり使い分けられていた。それはもう不気味なほどに。語った話が話でなかったらアリアも感心したかもしれない。

「いやいや。そんなに褒めなくても。つつい熱が入っちゃったわね」

「褒めてないわよ。……大体話も若干盛っていたでしょ？」

メイの話ではやたらとユーイがアリアに詰め寄ってきたりしていた。それは夜にあったときの一回しかない。アリアは半眼でメイを見た。

「そう？話っているのはそういうものなのよ。でないと面白くないじゃない」

メイが当然のように言うのでアリアはため息をついた。これで、今日何回目だろうか。

「で、それ以降はどうなった知らないんだけど、どうなのかな？アリアちゃん」

それがあつたか……。アリアはさらに深くため息をついた。

メイに促されてアリアは知っていることを話す。

「まず、ソレイユさんから聞いた事を言うわ。

ソレイユさんによると、ユーイは記憶喪失らしいの。だから、私のことを覚えていないのも当然で……。でもペンダントのことは覚えているみたいだから、ずっと前の記憶は残っていると思うわ。私と

過ごしてた頃の記憶がないだけかも」

アリアはそこで一端口を閉じ、躊躇うようにしばらく黙って目の前の床をじっと見つめていた。そして、大きく深呼吸をするように息を吸って、吐き出してから口を開く。

「ユーイには、……妹がいて。でもソレイユさんはいないって言っていて、どうなっているのか分からないんだけど、いないことになっているらしいの。ユーイのお母様も亡くなられて……」

「うわー……。もの凄い事情がありそうね」

メイは呟いた。その隣でマリシアは絶句している。アリアは目を伏せて、話し続ける。

「多分。別れた後に何かあったんだと思う。それが何かは分からないけど……」

「結構な問題よね……。どっから手を出していいか分からないわ」

メイはアリアの話聞いた後に思考しながら、さつきとはうって変わって真剣なまなざしで聞いた。

「アリアはそれで、これからどうしたいの？ 記憶を思い出させたいの？ただ、過去を知っておきたいの？

これからの情勢は危ういし、もしかしたらシス国と戦争になったら、お互いに敵同士よ。それでも、……関わりたいの？」

メイの言葉にアリアは顔を曇らせた。

「……分からないわ」

それが、正直な気持ちだった。分からないままに時は進んで、アリアは思わずユーイを知る術を得る道を選んだだけだった。目の前の選択肢に、迷っている暇がなかったというのは言い訳になるのだろうか。

知ってどうするかを考える時間なんてなかったのだ。

今の今まで自分の気持ちを振り返ってこなかったアリアは未だに自分が混乱したままだったのだと思い知らされる。

「分からないことだらけで、どうすることが最善なのか決められないの……」

アリアがどう答えるべきか考えていると、メイはえいとばかりにアリアの額を弾いた。

「別にそれでもいいのよ。今焦って答えを出せなんて言っただけだよ。また状況によって変わってくるだろうし……最善なんて分かったら苦労しないんだから」

「え……？」アリアは額を抑えて思わず声に出した。

「だから。私が聞きたいのは、それで後悔しないのかってこと。今さらだけど。アリアは分からないけれどそれでも行くの？　それで後悔はしない？」

「後……悔？」

「これは例えばの話よ。もし、幼なじみの過去を知ってそれがどんなに凄惨なものでも知らなければ良かったと思う？」

「それは、思わないわ」

むしろ知らない方が嫌だ。ユーイがどんなことに巻き込まれたのか、フェリキアの行方はどうなのかについて無知でいられるわけがない。

「もし仮に、それでアリアが命を狙われることになっても？」

「……それでも」

アリアは顔をしっかりと上げた。知らないでいることの方がきつと苦痛なのだ。それだけは数少ない分かっていることだから自信を持って言える。

「私は、関わらないで後悔するよりも、例え後悔しても関わる道を選みたいの」

アリアはきつぱりとした声で言うと、メイは「分かったわ」と微笑んだ。

それは、今までのとは少し種類が違うような、晴れ晴れとした笑顔だった。アリアは、その笑顔に息をのんだ。

「じゃあ、取りあえず、戦争を止めましょうか？」

「え？」

そして、思わず聞き返した。

メイがまるで今日は出掛けるのを止めましょうかと言うようにで戦争を止めると言い放った事に驚いたのだ。

「だって、戦争起きたらそんなことしてる場合じゃないでしょ。敵だの味方だの面倒臭いわ。それ以前にシス国に行っている最中に戦争が起きれば私達、命すら危険だけど」

「あ…そういえば、そうか」

アリアはそれに初めて気付いた。密偵になるって決めたけど……そんな危険があったのか。

「…アリア。それ誰にも突っ込んでももらえなかったの？」

メイが呆れながらアリアに聞く。

「うーん…。そう言えばしつこく確認を取られたような」

クロウリーや色んな人達に止めるなら今の内だと言われたアリアは記憶を引っ張り出しながら言った。誰も言わなかったのは、言わなくてもわかっていているだろうと思つての結果であるが、それが裏目に出たようだ。

「…でも、知つても私はこっちを選ぶわ」

アリアはしばらく思い返していたが、やがて振り切ったような笑顔を浮かべた。

「…それでこそ我が親友」そう言つてメイはアリアを軽く小突いた。

「…私のことも忘れないで下さいませ。思いは同じですわ。そのために、私はシス国へ行く必要があるのですわ」

マリシアも弾んだ声で言った。

「それじゃあ、行きますか…いざシス国へ。我らが野望、叶えようぞ！」

「…野望なの、これ？」

アリアが疑問に思うと、メイがいつものように笑う。
「野望って響きが何かそるじゃない」
「そる？　どういう意味なのですか？」
「メイ！！　マリシア様に変なことは教えないでね！」
王女の馬車の中で外に負けまいぐらいに声が響いた。

*

*

*

「もう王女も出発…。この国ともしばらくおさらば、か」
シス国の大臣はワインの入ったグラスを無造作に回しながら言った。そして、ワインの匂いを楽しんだ。

「そうね、全て貴方の思惑通りに。これで、貴方は満足なのかしら？」

王妃はテーブルに頬杖を着いて、大臣に問う。

出発の日の朝。王妃と大臣は最後の話し合いを行っていた。非公式であり、その場には二人しかいないのでその内容は本人たち以外分らない。

そして、テーブルにはチェスが置かれていた。その盤の上の駒は煩雑に散らばっているため、どちらが勝ったのか、当事者以外分らない。

「いや、まだまだ…足りないな」大臣はこの上もなく嬉しそうな顔をして言った。

「…贅沢なのね。そういう男は嫌われるわよ」

「何に？」

「女に、よ。…勝利の女神様も含めてね」

大臣はフツと笑う。

「そんなもの、どうでも良いさ」

「……貴方、どうしてこんな事をするの？」

王妃は唐突に大臣に問うた。

戦争を起こそうとしているのは分かっている。でも、それに何の得があるというのだろうか。

ソマリア国は商人の国。シス国は職人の国。ソマリア国は貿易で得た食料や物資をシス国へ、シス国は鉄などの貴重な鉱産資源をソマリア国へ。それで上手くいっていたはずだった。

ソマリア国とシス国は持ちつ持たれつで、争うことに得がないのは事実だ。それどころか、争えば互いに消耗し合って他の国に攻め込まれることぐらい理解しているはずなのに。王妃は未だに、その理由を知らない。計ることが出来ない。

大臣はその問いに、手に持っていたグラスをテーブルにおいた。グラスの中のワインが小さく波紋を描いて、しばらくして消えた。それを眺めた後、押し殺したような声で囁いた。

「それは、欲しいものがあるからだ」

「……え？」

王妃は聞き取るのもやつとな声を拾うと、思わぬ答えにそう返していた。大臣は目を細め、グラスをテーブルに置いて席を立った。

「そのうち分かるだろう、……お前なら」

そして、手元の盤から落ちて転がっていた駒を拾いあげる。

「…君の駒は頂いたよ」
マリンア

その駒を王妃に向かって放ると、大臣は去っていった。

王妃はそのふわっと宙を舞う駒を受け止める。そして、手の中の駒を見つめて目を伏せた。

欲しいものがあると言ったけれど、それはソマリア国が……それとも。

王妃はしばらく思考した後、駒をそつと盤の上に置き、小さな声で呟く。

「貴方は、もう私の味方でいてくれないのね……」
それは、仕様のないことなのかもしれないけれど。

戦争を止めたいと願う者。戦争を仕掛けようと欲する者。
両者の色々な思惑が乗せられた馬車は一体どちらの駒になるのか……。
それは、誰にも分からない。

小話：とある日の王家の華麗なる晚餐

「マリシア！！ 今日も元気だったかい！？」

「はい、朝食と朝休みとお昼と午後のティータイムの折にも聞かれたときと同じように元気ですわ、お兄様」

一日に何回も同じ事を聞くな、と暗に皮肉を込めてマリシアは返事した。

「そうか、それは良かった。邪魔な奴やむかつく奴がいたらすぐお兄様に言うのだぞ。すぐに消してやるからな」

皮肉が全く通じてない様子のマルスは王族にあるまじき事をニコニコ笑って言った。

これは、大丈夫なのだろうか？マリシアは若干不安を抱きつつも取りあえず微笑んでおいた。一応、優秀で能力は高く、人望も厚い兄なのだが…。ちょっと肉親には甘いのだ。

周りの人間は甘いどころの騒ぎじゃないと文句を言うだろうが、マリシアはマルスが何を裏でやっているのか知らないのだただの『異常に心配性な兄』と知っているのだ。

「それよりも、お母様はまだいらっしゃらないのか？ ずいぶんと忙しいのだな」

「そうですね。……最近は何かと物騒な動きがありますから」

マリシアはソマリア国の第二王女である。

そして、もうすぐ夕食の時間だ。家族そろって夕食を食べるためにマリシアはここ、王家の間でマルスと共に姉と母が来るのを待っていた。

二人がしばらく話しながら待っていると

「遅くなりました」

そう言ってミネルが部屋に入ってきた。マルスは顔を輝かせた。

「ミネル！！ お前も元気だったか？」

「ええ。今朝もその後も、何度も何度も同じ事を聞きますが、ミネルは元気です」

ここの反応が似てくるのも姉妹だからだろうか。

マリシアは思い直す。

…いや、多分兄がしつこいからだろう。

「今日もミネルに群がる虫どもを始末しておいたぞ！！」

そして、いつものように皮肉が通じない兄は自慢げに言い放った。虫？ それってもしかして、最近ミネルに言い寄ってくる年頃の貴族の御曹司のことを指しているのだろうか？

…やっぱり不安になってきた。

「まあ、寒くなってきたこの時期でも虫が出るのですか？ 知りませんでしたわ」

ミネルは目を丸くして言った。

姉はやや世間知らずだ。普通の人間が知らないようなことだけはよく知っており、魔法も使える。有り得ないくらいに。何だろう、このアンバランス…。

恐らく兄の計画的犯行だ。とマリシアは思っている。

マリシアは好奇心旺盛な子供だったためにミネルの二の舞にはならなかったが。

「そつえば、最近ミネルは来るのが遅いな。何か用事でもあった

のか？」

「ええ、…実は、最近私にも友人が出来ましたの！」

「…それは男か？」

そう尋ねるマルスの声が一段と低い。…なにやら黒いオーラが見えるのだが。

男なら、抹殺しようとマルスが考えていることをマリシアは知らない。

「いえ、女の子です。アリアというのですよ。マリシアの友人と同じです」

ミネルは柔らかに微笑んで言った。

「何！？アリア？」

マルスは驚きの声を出した。最近マリシアが嬉しそうに喋る話題の侍女で、マルスは少々そのことが面白くなかった。

マリシアも予想外の名を聞き、疑問を抱いてミネルに尋ねる。

「どこで、知り合われたのですか。接点が見あたらないような気がするのですけど」

「まあ、……偶然です。私、アリアに色々なことを聞いているの。とっても為になります」

「…具体的に何を聞いているんですか？お姉様」

気になってマリシアはさらに質問をした。

「今日は硬貨について。ねえ、マリシア知っていた？この色の付いた硬貨より色の付いてない硬貨の方が、価値があるのですよ。私、金貨しか見たことなくて」

ミネルはどこからか手に入れたらしい銅貨と銀貨をマリシアに見せて言った。

マルスとマリシアは何とも言えず黙り込む。

「どうしたの？二人とも黙って……」

ミネルは首を傾げた。

マリシアは家族との関係は良好で、他の王族とは比べものにならないくらい暖かい家庭にいると思う。

これも、ソマリア国の王族が極端に少なく、王の座を争い取り合う必要性がないからかもしれない。

シス国へと留学する日が迫っているため、こうした家族と過ごせる日々は限られている。

だから、家族はそうしたマリシアの思いを無言で汲んで、全員一緒に夕食を食べようとしてくれるのだ。マリシアはとても嬉しかった。周りを思えばずっと嬉しく感じた。

マリシアは知っているからだ。

周囲の人々の思惑を、自分に向けるその思いを。

「マリシア様。これから、儀式がございますが、この紙の通りに動いて下さいね」

「我が家の自慢の息子です。年齢も身分もマリシア様にぴったりかと。どうか、お目通しを」

王女という符号。ただの出世のための駒。

「シス国への留学が決定いたしました。早速準備を」

…今回は、有効な人質。

人々はただ、「王女」という肩書きを必要としていてマリシアの人格や意志なんてただの付属物、邪魔なだけ。ただ命令を聞くだけの人形としての役割をマリシアに要求している。

マリシアは今までの人生で一度として「マリシア」を要求されたことがない。……家族以外は。

だから、家族以外に「マリシア」であることを認められる日なんて来ないと思っていた。
人々の目線に触れるたび、自分は人形だと思い知らされる。ただの人形でしかない自分を。

「泣きたいときは泣いて、怒りたいときは怒って下さい」
そう言ってくれる他人がいると、思っていなかった。

マリシアは知らない。

「私はこのように深く考え、多くの感情を抱く人を人形だなんて思いません」
そんなことを言ってくれる家族以外の人間を。

だから、マリシアは我が儘を言った。姉になって欲しいと。
なぜなら…

ガチャツと扉が開く音がした。三人はドアの方を見た。

「ただいま」。マルスにミネルにマリシア！！今日の夕食は私が腕によりをかけて作ったの！！ た〜んとお食べなさい」

「っ……！！」入ってきて早々の母の言葉に三人の顔が引きつった。

母は凄い人だと思う。夫を亡くしても、悲しみに暮れたままではなく、マリシア達に惜しみなく愛情を与えて、王妃としてそれ以上の役目を果たしてきた人だからだ。でなければ、王が急逝してからもソマリア国が発展し続けることは有り得なかったに違いない。

ただ、その分…「はい！ 全部並べました。美味しそうですね？」

「お母様。つかぬ事を聞きますが、この目の前の黒いスープは一体…」

黒いのがやたらプカプカ浮いている謎のスープを指差してマルスは尋ねた。

「え？ ただのオニオンスープだけど。タマネギがちょっと焦げたの」

「…そうですか」

「お母様。この黒くて丸いものは…」ミネルがエッグスタンドにある黒く炭化した物質を指差した。

「ゆで卵」

その分、代わりといつては何だろうが…料理が壊滅的である。

母は加減を知らない人なのだろう。火加減がいつもおかしい。

そして、恐らくその血はマルスにも引き継がれているに違いない。

マリシアはちよつと行き過ぎなぐらい過保護な兄を見て常日頃から思っていた。

「それでは、頂きます」モノクロな食卓を囲んで母が満面の笑みを浮かべて言った。

それより、今、この状況をどうしようかと思う。

それにしても何故母はこの黒さに疑問を抱かないのだろうか？こんなに真っ黒なものは食べられるものではないと思う。

「お、お母様！私お母様のために急に手料理が作りたくまりました。速攻で作ってきますね」「私も手伝いますわ」「僕も…」

そう言つて三人はダッシュで近くの部屋にある王族用のキッチン（母が何故か作つた）へ向かい、料理を始める。

何度か経験している修羅場だから、分担もなかなか様になってきている。

マリシアが食材を洗い、マルスが食材を切つて、ミネルが調理する。

そして、某。ユーピーの三分間ク。キングも真っ青のスピードで料理を作る。

「あらあら、早いわね」

「ふふ。ちよつと頑張ってみました。どうぞ、これを食べて下さいな、お母様」

それ（炭化した料理）を食べたらきつとお腹を壊すから……。三人はその言葉を胸の内にしまった。

「美味しいわね。皆、作ってくれてありがとう」

違う意味の母の影響で結構料理が上手くなった三人は胸をなでおろした。

「……もうすぐ、マリシアも留学に行ってしまうから母の手料理を食べさせようと思ったの」

「ありがとうございます、お母様」「そうだな。もし向こうで嫌な奴がいたらこっさり消すだけの人脈はあるのだから遠慮するなよ」

「……善処しますわ、お兄様」

「ふふ……。大丈夫よ。お兄様が本気でそんなことするわけないじゃないですか」

暖かい笑顔、楽しげな声……。

血の繋がりよりも深い心の繋がりが。そして、それでも埋まらなかった、心の空洞。

何故か埋まらない寂しさが、家族に申し訳なくて隠していた。

……けれど、もう寂しくない。今は。

マリシアは微笑んだ。

「…あ、そうだ。私の作ったスープってどんな味なのかしら？飲んだことないのよね」

王妃がふと思い立って目の前の真っ黒なスープ（オニオンスープ）へ手を伸ばす。

「…！！いけません、お母様！僕達の手料理を全部食べてからにして下さい」

「そうです！！ほら、このサラダは私が作ったのですよ」
マルスとミネルが慌てて言った。

マリシアはアリアに我が儘を言った。

なぜならマリシアにとってアリアに出会うまでは家族が世界の全てだったから。

だからせめて、マリシアが現実を受け入れるまで…どうか姉になってと願った。

「…これで、マルスもミネルもマリシアもいいお嫁さんになれるわ」

「お母様。…僕は死んでも嫁には行きませんか？」

「ふふふ。半分ぐらい冗談よ」

「半分は本気なんですか、お母様」

今日も、王家の食卓はうるさくて騒がしくて……楽しい。

マリシアは自分たちで作った料理を口へ運んだ。

「…美味しいですわ」

こうして、華麗？なる王家の晚餐はゆっくりと終焉を迎えたのであった。

第二十二話：とある国の、とある執務室にて

青年は部屋で書類を読んでいた。特徴的な落ち着いた色目の赤い髪は襟足が肩に届くほどで、赤い瞳は穏やかな光をたたえている。男性にしてはやや細身の体型には贅肉はなく、高級な衣服に身を包んでいる。

部屋は広く窓からは海が一望できる。凝ったされど機能的な装飾品は持ち主の品の良さを示していた。

青年は窓に背を向けて椅子に座っていた。目の前の机に積まれた書類の山は普通の人のする一日の仕事の量ではないと思われるが、青年は涼しい顔で書類を片づけていく。

そして、おもむろに机のティーカップを手取る。中に入っているのは紅茶。青年は紅茶を愛飲しているのだ。ふわっと漂う紅茶の良い香りが青年の頬をゆるませた。

その時だった。彼の使用人が血相を変えて部屋に入ってきたのは。

「ご主人様！！ 大変です。お坊ちゃまがいなくなりました！！」

ガチャン。食器の割れる音がした。青年が手に持っていたティーカップを落したのだ。赤い絨毯に茶色いシミが広がる。

「なん……だと？」

青年は驚きのあまり席を立って使用人の方へ歩む。使用人は青年に紙を渡した。

「これが、お坊ちゃまの部屋に残されていて……」

使用人が持っていた紙には癖のある汚い字でこう書かれてあった。

「思うところがあって家出します。探さないで下さい」

「あんの馬鹿弟！ あれほど外へ出るなど言ったのに！！ 奴が出たら、事態はもっとややこしくなる一方だ」

青年は、さっきまでの余裕はどこに行ったのか、感情を押えられずにわなわなと震える拳を机に叩きつけた。

「その通りでございます」

「ほんの何日前に、飼い猫を探しに出たあげく何をどう間違えたのか盗賊団に捕まり、私が勢力を上げてその盗賊団を潰すという羽目になったばかりだぞ」

「はい。そのあと、お坊ちやまの愛猫は普通に帰ってきたのを覚えております」

使用人は涙ながらに相槌を打った。

「…せつかくの半年に一度の休みだったのに…全部潰れた」青年は悔しそうに言う。

「それより前にも、確か散歩に出ると言ってまたしても何をどう間違えたか、山で遭難し、私は搜索隊を出して三日間探しまくり、拳げ句の果てには奴が温泉を掘り当てたことで搜索隊に発見されたんだぞ」

「…あの温泉は今もよく繁盛しております、ご主人様」

「他にもまだあるぞ。急に空が飛びたいと言い出して家を飛び出し、有り得ないことに町の時計台から自作のマントを装着して飛び下りて…」

「はい、あの時計台は『飛び下りても無傷、奇跡の時計台』として観光名所となっております」

「…私はあいつを拾ってから人の何十倍もの苦勞をしている気がするのだが」

「きつと気のせいでございましょう」

「そうか…ならいい」

青年はしばらく手で頭を押さえていたがふと思い立って使用人に問いかけた。

「…爺は？ 予測不能なあいつを追いかけられるのは爺だけだ」

「残念ながら…爺は卵を買いに出掛けております。ご主人様！」

「なんて間が悪いんだ！ このまま、あいつを野放しにするほかにないのか……」

「あつ、伝書鳩です！ ご主人様！！ 爺からの連絡が来ました」
部屋の窓に一羽の鳩が近づいてくるのが見えた使用人は落ち込む青年に向かって指を指して告げた。

窓の隅には鳩がとまる為の場所と、そこだけ開く小さな窓があるのだ。非常事態用のためだ。どうやら今がそのときらしい。

青年は鳩を見て、不安一色だった顔にわずかながら安堵の表情を浮かべた。

「さすがは爺だ。あいつの動向を追ってしてくれたのか。手紙を解読しろ」

使用人は早速鳩に付けられた手紙を取り、青年に言われたとおり解読する。

「お坊ちやまを追跡中。現地点はソマリア行きの舟、だそうです」

「ソマリア国か…。大体奴の思惑は読めるが…」青年は思念する。

「下手に連れ戻そうとすると何をするか分からないからな…」

「爺にこう伝えておけ！『動向を見張り、危なくなったら助けよ』」
「分かりました」

使用人は主人の言葉を聞くと、その手紙を書くために黙礼をしてから部屋を出て行った。

青年は残された部屋で、机に両手を置いて呻くように呟く。

「このまま、話がこじれなければいいのだが…」

まあ、無理かもしれない。

何せあいつは最凶のトラブルメーカーだ。あいつが介入してこじれなかった事は今までかつてこれっぽっちもない。断言できる。

初めてのおつかいレベルのほのぼの話が連続殺人事件レベルの話になるまで、こじれさせる。あれはもはや天賦の才能かもしれない。

今のソマリア国とシス国に弟が介入したら、どんなに恐ろしいことになるだろうか。

……お願いだから、何もしないでくれ。

想像するだけで背筋がぞつとした青年は思わず祈った。

*

*

*

「ハックシヨン！」少年は船の中で一際大きくしゃみをした。

少年の赤い髪は短くあちこちではねていて、赤い目は大きく好奇心の光をたたえている。身長を見るからに十才程度だろう。

少年は鼻を噉った。

「おい、大丈夫か、坊主？今は波が荒れてるから気い付けや」

船上員の男が少年に呼びかけた。男は少年の周りに誰もいないのを見て怪訝な顔をした。

「……坊主、お前一人旅か？」

「ん、そうやけど。大丈夫やで。ちゃんと手紙は書いてきたからな」少年が自慢げに言うのを聞いて、男は意味が分からず首を傾げた。男は細かいことは気にしない性分らしく、純粹に一人旅に出る少年に感心したようで、少年に優しく話しかけた。

「手紙？何のことは分からねえが、そんな年で一人旅とはたいした奴だ。何か困ったことがあったら助けてやるよ」

「ありがとうな、おっちゃん。ええ人やな。俺、シス国まで行きたいんだけど、道教えてくれへん？」

「シス国か。ソマリア国ならまだしも結構遠いな。……俺の知り合いにシス国に用のある奴がいるからそいつを紹介してやるよ」

「さっずがおっちゃん、男前やな。よろしく頼むわ」

少年はそう言うと言つて海を見つめた。今少年が乗っているのは貿易でソマリア国へ向かう船である。その甲板に少年はいた。

男は肯定の返事の代わりに少年の肩を叩くと、仕事を続行するため甲板から離れる。その時、舟の中に入るドアの所がわずかに開いているのを見た。

こういうのは危険だ。中途半端に閉まったドアは風に煽られて突然何かを思い出したように開き、それに人が巻き込まれ怪我をする。男はドアを閉めようと近寄った。

しかしその事は叶わなかった。男は思わず我が目を疑った。

「これはこれは、すいません。私は怪しいものではございません故」
執事の格好をした老人がドアの隙間で窺うように立っていたのだ。白髪はドアの隙間からはいる海風で靡きつつも乱れがない。一本筋が通っているような立ち姿はまさしく執事そのものであった。

このお世辞にも立派とは言い難い船には似つかわしくない存在に男は疑問を抱いた。

「あんたは一体……」

「それは気にする必要のないことでございます。それより、お坊ちやまの手助けをして下さるようですね。これはほんの気持ちでございます。急いで来たので手持ちがこれしかないのですが……」

そう言つて執事は船上員の男に茶色い紙の包みを渡した。男は怪訝な表情を浮かべてそれを受け取り、包みの中を確かめようと開けた。

包みの中には、白く滑らかな楕円形の球体が数多く入っていた。この色、見たことのあるフォルム……。

「なんで卵なんだ……？」

思わず呟いてしまった。

しかし、その返事は返されることはなかった。男が我に返る頃には執事は姿を消していたのだ。

一方、少年は甲板の上で波が揺れるのを黙って見つめていた。

「いよいよやな……。兄様のために俺が頑張らんと……」

少年はそう言って手すりに乗せた手を固く握りしめた。自分の兄がそれを全く望んでいないとは夢にも思わないで。

時はちょうど、ソマリア国の王女がシス国へ留学する二週間前のことであった。

第二十三話：再び？馬車での野外授業

アリアは馬車に乘せられているはずだった。

いや、事実それは正しい。腰掛けた備え付けの椅子から絶え間なく振動がくるからだ。

馬車にはマリシア、メイ、そしてアリアの三人だけ。これはマリシアが望んだことらしい。元々世話を焼かれることが好きでないマリシアは、侍女を側に置きたがらないので、もつともマリシアに気に入られているアリアが乗ることになったらしい。大変恐縮な話だ。そして、メイは今や貴族令嬢。騎士の護衛対象に入っているらしく、そのため守りの堅いマリシアの馬車に乗ることになったのだと言っていた。

まあ、それはいい。

ソマリア国とシス国はなかなか大きな国で、二国間には街道が通り、貿易が盛んだ。アリアたちはそこを通過してシス国へ行くことになっている。

街道の両脇は道行く人が寝る場所を確保できるように木が刈り取られている。そこで人々はテントを張ったり馬車で寝泊まりして夜を過ごすのだとか。

後は全部森、森、森だ。木が、我が物顔で生い茂っているので、一歩足を踏み入れたら恐らく迷子になってしまうだろう。

野外で寝泊まり。といってもさすがは王族。

アリアが馬車の内装を見回すと凝った装飾がそこかしこに彫られているし、金ぴかだし、どうにも見慣れない景色が広がっている。クッションはふかふかで、それを枕によく眠れそうだとアリアは思った。しかし、備え付けの椅子がそのままふかふかのベッドになるのでクッションを枕に使うような出番はないようだ。

ベッドが二つあるので、メイとアリアは二人で一つのベッドだ。

本来アリアは侍女である立場なので、床でいいと言ったがメイとマリシアが反対したのだ。

とは言ってもさすがにマリシアは小さいとはいっても王女様だから、アリアはメイのベッドがせいじっぱいだった。

マリシアはそれを仲間はずれにされているように思っらしく文句を言っていたが、マリシアにそんなことをさせたら怒られるに決まっているので勘弁して欲しい。

ちなみに他の侍女は別の馬車に乗っているらしい。そちらも、泊まれるようになっていそうだ。

ただ護衛のためについてきてくれているシス国の騎士たちは馬車の外で簡易なテントを張って泊まるそうだが。

： 本当に申し訳ない。こっちは至れり尽くせりで。

食料は他の、料理が得意な侍女が担当する予定だ。ついでに侍女たちの分まで作ってくれるというのだから何とも頼もしい話だ。もちろん、アリアもそれほど料理が得意ではないが手伝いに行こうと思っている。

何よりも嬉しいことといえば朝の給仕がない。貴族はここにはいないし、騎士たちは自分のことは自分でやる主義らしく自炊するという話だったからだ。

おかげで朝の給仕の地獄が夢のようだ。ゆったりとした朝を迎えられるのは侍女になってから初めてだった。王女付きの侍女のときですら、ここまでの余裕はなかった。

アリアは感動していた。

アリアは基本的にマリシアの分の朝食を運ぶだけで事が足りるのだから楽なことこの上ない。

それも、大変ありがたい話だ。が……

「それで……ってお姉様！！話を聞いていますの？」

マリシアが揺れる馬車でアリアに向かって注意した。どこか遠く

を見ていた様子のアリアは慌てた。

「ええっと。すいません。ちょっと前から聞いてません」

「これだから、アリアは……。正直な子ね。せっかくマリシア様が呪文講座をしてくれるんだから聞きなさいよ」

メイが横やりを入れる。

今は何故か、呪文講座が始まっていた。それも馬車の中で。アリアがユーイのことについて根掘り葉掘り聞かれ、メイたちが満足した後のこうした会話が引き金だった。

「アリアって地獄の授業だの言ってたけど、どんなことやったの？」

あの時のアリアのやつれっぷりはひどかったわよ」

「……そんなにひどかった？」

「かなりすごかったですわ。アリア姉様。一体どうしたらあんな事になるんですか？」

「うーん。ダンスや礼儀作法。貴族それぞれの家の相互関係を覚えるために歴史を掘り起こして、あと、向こうで毒盛られたら困るから薬草や薬についてちよつと学んで、シス国についての歴史についてとか……。あと」

「まだあるの？」

「いいお野菜の見分け方とか、新鮮な魚の見分け方とか、商品の値切り方とか」

「……後半やけに所帯じみてるわね。必要あるの？」

アリアはメイに言われて、何とも言えず、首を傾げて苦笑いした。後半のものは、ミネルとの会話のときに、クロウリーがやたらと詳しくだったので、アリアもミネルと一緒に聞いていたのだ。これもいつか役に立ちますからとクロウリーは断言していた。いつ役に立つんだらう、これ。と思いながら聞いていたのを覚えている。

「私はてつきり呪文の特訓でもやっているのかと思ったけど、案外内容は普通ね」

「呪文なんてものが数週間でできるわけないでしょ？ 私の家はそんなに位が高くないから習わなかったし」

アリアは口を尖らせて言った。呪文はおろか、小さい頃から最低限の教育以外ほとんど何もされていないので、侍女になってやっと礼儀作法や貴族の間のしきたりが少し分かってきたのだ。

「メイはどうなの？ 呪文唱えられるの？」

「いや、無理ね。全くできないわ」

「えー？ 習わなかったの？」

レイアス家の令嬢、メイならいくつか呪文を唱えられそうだと思うっていたアリアは驚いて声のトーンを上げた。

「もちろん習ったわよ。でも適性がね……」

「適性？」

アリアはどういう意味か分からず聞き返した。メイがそれに答える前に、

「私が教えて差し上げましょうか、アリア姉様」

マリシアがおずおずと言った。

「え？ マリシア様、呪文が使えるんですか？」

マリシアは、そつと手のひらを差し出して、何事かを唱えた。呪文を習ったことのないアリアは何を言っているのか欠片も理解できない。

しばらくして、マリシアの手の上に光の玉のようなものが出てきた。

「光の呪文ですか？」

「そうですわ。これで、夜もばっちり明るいです」

「すごいですね、マリシア様。この年で呪文が使えるなんて」

とアリアが言ったらなんでもないとといった顔をしてマリシアは「そんなことないですわ。私は簡単なものしかできませんし。ミネル姉様は呪術師の資格を十歳のころに得たらしいですから」

と返した。

呪術師というのは、呪文を扱う者のことだ。普通の人間はちよっ

とした火を付ける程度のことしかできないが、彼等は妖精を呪文により使役し雨を降らせたり、土を移動させてトンネルを作ったりできるのだ。通るだけで一生が安泰だと保証されたも同然という超難関なものらしいが…。どう考えても十歳は異常だろう。

何なんだろう、この王族は…。いくらなんでも神様はこの王族に甘すぎるのでは。

アリアとメイは絶句した。

これが、マリシアによる呪文講座のきっかけである。マリシアも子どもだから大したことはないと思って甘く見たアリアがいけなかった。マリシアは、あの王妃の子どもだということを計算外にしていた。

「アリア姉様は呪文について習ったことがないのですね。それでは初歩から説明しますわ」

うきうきとした声でマリシアは説明し始める。

「呪文の原理から説明しますと、誰でも知っていることですが、呪文などの魔法といわれる類のものは全て妖精の力を借りるという前提で行っているものなのです。

いわば、妖精に頼むというのが正しいですわ。そのために人は妖精と意思を疎通させるための呪文、つまり“妖精言語”を編み出したのです。

言葉が通じなければ、人の間でもなかなか思い通りにならないものですからね」

「……はい」

饒舌に話すマリシアにアリアはたじたじだった。

「呪文で妖精とは意志を通わせることができるとしても、そこにはまた別の問題があります。

まず、妖精は頼まれたからといって言うとおりに動いてくれませんわ。妖精からすれば何の見返りもないですし、当然のことかも知れ

ません。

それは、妖精と呪文を唱える人の相性によるのですわ。これを適性というのです」

「そうそう。私、妖精にあまり好かれてないみたいでねー。だから早々に諦めたのよ」

メイが若干口を挟んだ。

マリシアはきちんと座ったまま、人差し指を立てた。

「これが、一つめですわ。ここまで分かりましたか？」

アリアは黙ってこくこくと頷いた。

「次に妖精の特性があります。

例えば、火の妖精は燃やすのが好きな性格ですから、一般人でも簡単に扱うことができます。

しかし、土の妖精はじつとして動かない特性があるので、呪文で動かそうとしてもなかなか動こうとはしません。だから、“頼む”呪文も長く説得するようなかたちになるので難易度が上がるというわけです。……これが二つ目です」

マリシアは立てる指を一本増やしながら言った。

「そして、大事ななのは“目”を養うことです。妖精は見えるものではないので、正確には見るのではなく感じるといったところでしょう。妖精のいないところでどんなに上手く呪文を唱えたところで発動するわけありません。妖精の気配を感じ取る事が大事なのです。これは、元々の素質が大きいですわ。……これで三つ目」

アリアの前でまた、立つ指が増やされる。一つ目がすでにあやふやなアリアは話を聞くので精一杯だ。

「そして、呪文を唱える“発音”。これで呪術師の力量は決まりますわ。呪文：妖精言語はかなり発音が難しい言語なので、小さな頃からの鍛錬が必要です。綺麗な発音だと、呪文の成功率も上がります。……これで最後です」

マリシアはそこで指を下ろした。アリアはマリシアが言うことを聞くので精一杯だった。

これが十歳なのか……。改めてマリシアの年齢を疑う。まるで教師に教えてもらっているかのようにしつかりした口調だったのでアリアは呆氣にとられて何も言えなかった。でも、これはまだ序の口だった。

「呪文について、簡単なものなら初めてでもできるかも知れませんよ。やってみませんか？そうですね……風の呪文はいかがですか？」それから、アリアはひたすら呪文らしき言葉を教わっているが、さっぱりわけがわからない。正しい発音が何なのかさっぱり分からないのだ。

「ファルトユス……」

「最初のファはもっと強く。ルは軽く付け足す程度に。それとファの発音が若干違いますわ。舌を歯の裏につけて……」

呪文の最初の一句ですらこのような感じた。アリアはかなり疲れていた。

火を出すくらいならアリアだってできる。ぶっちゃけ火を出すことに限っては呪文などいらない。「燃えろ」だけで十分だ。炎の妖精はどうやら燃やしたいあまりに人語ですらも受け付けてしまうようだ。炎の妖精なんて、見えなくてもかまどにはいるので“目”もいらない。だが、それは普通の人なら誰でもできるので何の自慢にもならない。

火をつけられたらそれでいいのではないか、とアリアは諦めかかっていた。これではメイが諦めるのも納得だ。

それで、今に至る。マリシアは一度教え出すと熱が入る性質のようで、呪文講座はかなり長い間続いていた。

「私がさっき言ったのは、もっと滑らかに発音しないと呪文として発動しないということですわ。発音自体は上手くなってきたのですから……」

アリアはマリシアに促されて、気を取り直してもう一度、呪文を

唱える。

「フェルっ……痛っ」

アリアが唱えたところで馬車が大きく揺れて、アリアは口を押さえて顔をしかめた。

「舌嚙んだ……」

「……ご愁傷様、アリア」

その大きな揺れは街道を出たことで生じたもので、馬車がゆっくりと減速して止まった。今日はここで野営するらしい。いつの間にやら夕焼けが窓から差し込んでいた。

助かった。これで呪文講座も終わっ…

「……アリア姉様。今日の所はここまでのようですね。また、明日頑張りましょうね」

また、明日、と言われてアリアはがっくりと肩を落した。

「あの……マリシア様」

ちゃんと正直に言おう。私にはもう無理です、と。アリアは覚悟を決めてマリシアに問いかけた。

「どうしました？」

マリシアはとっても嬉しそうな顔でアリアに言う。上機嫌な様子の顔は、呪文講座がいかに面白かったかを物語っていた。

「……何でもないです」

アリアはそんな様子のマリシアに、意志が挫けた。あんなに嬉しそうな顔をされては何も言えなくなるのも無理ないだろう。

それを見ていたメイがポンと背中を軽く叩いた。

「頑張って。マリシア様の説明、そこの教師より上手いし。ね？」
夕焼けがさしこむ馬車の中でアリアはがっくりと肩を落した。

第二十三話・再び？馬車での野外授業（後書き）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4273q/>

magnet

2011年4月2日14時05分発行